



中華書局編輯部編『詩詞曲語辞辞典』に見る唐詩の特徴的な用法について（8）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 東京学芸大学教育実践研究推進本部 公開日: 2025-02-10 キーワード (Ja): 唐詩, 唐詞, 異読, 訓読, 俗語, 口語, 語彙解釈 キーワード (En): Chinese poem, Tang poetry, “idoku” , poetic vocabulary 作成者: 高橋, 未来, 長谷川, 真史, 有木, 大輔, 大山, 岩根, 関, 沙由里, 戸高, 留美子 メールアドレス: 所属: 大阪公立大学, 東京学芸大学, 筑波大学附属駒場高等学校, 亜細亜大学, 兵庫県立尼崎稲園高等学校, 東京学芸大学
URL	https://doi.org/10.50889/0002000857

中華書局編輯部編『詩詞曲語辭典』に見る 唐詩の特徴的な用法について (8)

高橋 未来^{*1}・長谷川 真史^{*2}・有木 大輔^{*3}・
大山 岩根^{*4}・関 沙由里^{*5}・戸高 留美子^{*6}

中国古典学分野

(2024年8月31日受理)

要 旨

本稿は、唐詩の語彙における特殊な用法を分析するものである。唐宋から金元明の詩詞や戯曲などには、時代や地域性、社会階層によって生み出された俗語、口語、方言が詠み込まれている。それはオーソドックスな意味とは異なるために、精確な解釈には、その特殊語彙（以下、異読と称する）の意味を把握することが必要となる。そこで2015年度紀要より、異読の用法を多く収める中華書局編輯部編『詩詞曲語辭典』（中華書局、2014）から唐詩の用例を中心に訳出し、検討を加えてきた。本稿では、中国語のピンイン表記によるFからZまでの35項目を取り上げて、唐以前から唐代までの詩詞の用例を訳出し、異読の検討を行った。

検討の結果、「見」、「能」、「且」等の、一語で多くの語義を持つ語がとくに見られた。詩人では李白、杜甫、白居易の用例が多く、対句と互文の用法に異読が多いことが全体的な特徴としてあげられる。

キーワード：唐詩、唐詞、異読、訓読、俗語、口語、語彙解釈

はじめに

唐詩の語彙には、しばしば時代や地域性、社会階層によって生み出された俗語、口語、方言のたぐいが見られる。それらの語彙（以下、異読と称する）は一般的な意味とは異なるため、日本の伝統的な訓読では、その意味を捉えきれない場合があった。そこで複数の研究者による研究会を開き、張相『詩詞曲語辭滙釈』（中華書局、1953）その他を再編成し、異読語彙を多く収める中華書局編輯部編『詩詞曲語辭典』（中華書局、2014）から、唐詩の特殊な用例を訳出し、検討してきた（高橋未来・佐藤正光「中華書局編輯部編『詩詞曲語辭典』に見る唐詩の特徴的な用法について」、本紀要第67集、2016～「中華書局編輯部編『詩詞曲語辭典』に見る唐詩の特徴的な用法について（7）」、第75集、2024）。またこの成果のうち、約200項目を『中華書局編輯部編『詩詞曲語辭典』翻訳稿』（東京学芸大学出版会、2020年3月）に発表した。

本稿はこれまでの成果に続き、唐代までの詩文における異読の用例を検討する。なお、唐詩を引用する際には『詩詞曲語辭典』の原文に拠るが、『全唐詩』（中華書局、1960）を校勘に用いた。また原則として日本

*1 大阪公立大学 文学部 言語文化学科 (558-8585 大阪府大阪市住吉区杉本3-3-138)

*2 東京学芸大学 日本語・日本文学研究講座 中国古典学分野 (184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1)

*3 筑波大学附属駒場高等学校 (154-0001 東京都世田谷区池尻4-7-1)

*4 亜細亜大学 経営学部 経営学科 (180-8629 東京都武蔵野市境5-8)

*5 兵庫県立尼崎稲園高等学校 (661-0981 兵庫県尼崎市猪名寺3-1-1)

*6 東京学芸大学 非常勤講師 (184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1)

の常用漢字の新字体を用いており、異体字については、意味が異なる場合のみ用いることとする。

1. 返倒 fǎndǎo

意味は「反側（反抗する、背く、逆らう）」に同じ。敦煌変文「父母恩重紐講経文」¹「不孝人、難説論、返倒二親非母曾、家内喧諍拗父娘、門前相罵牽宗祖（不孝の人は、説論し難し、二親の母曾²に非ずと返倒³き、家内に喧諍して父娘に拗^{そむ}き、門前に相い罵りて宗祖を牽く）」、また「及其長大、無孝順心、不報恩德、游閑³逐日、更返倒父母（其の長大するに及び、孝順の心無く、恩德に報いず、游閑なる逐日、更に父母に返倒^{そむ}く）」、また「為人不解思恩德、返倒父娘生五逆。共語高声応対人、擬真嗔⁴眼如相喫（人と為るも恩德を思うを解せず、父娘に返倒^{そむ}きて五逆を生ず。共に語るに高声もて人に応対し、眼を真嗔して相い喫するが如くせん」とす）」とは皆この意味である。（高橋）

2. 氛氲 fēnyūn

気や霧状のものが多いいことを形容する以外に、詩中ではまた感情が深いことをあらわす、「悠悠」にほぼ同じ。李白「鳴皋歌送岑徵君（鳴皋歌 岑徵君を送る）」（『全唐詩』卷166）「琴松風兮寂萬壑、望不見兮心氛氲（松風⁵を琴ずれば 万壑寂たり、望めども見えぬ 心氛氲たり）」。沈佺期「十三四時嘗從巫峡過他日偶然有思（十三四の時、嘗て巫溪より過ぎ、他日偶然にして思ひ有り）」（『全唐詩』卷96）「樹悉江中見、猿多天外聞。別來如夢裏、一想一氛氲（樹は悉く江中に見え、猿多くして天外に聞こゆ。別來夢裏の如く、一たび想えば一たび氛氲たり）」。また沈佺期「神龍初廢逐南荒途出郴口北望蘇耽山（神龍の初め、南荒に廢逐せられ、途に郴口に出でて蘇耽山を北望す）」（『全唐詩』卷95）「此中迷出處、含思獨氛氲（此の中出處に迷いて、含思独り氛氲たり）」。陳子昂「入東陽峽與李明府舟前後不相及（東陽峽に入りて李明府の舟と前後するも相い及ばず）」（『全唐詩』卷84）「孤猿啼寒月、哀鴻叫斷雲。仙舟不可見、搖思坐氛氲（孤猿 寒月に啼き、哀鴻 斷雲⁶に叫ぶ。仙舟 見るべからず、搖思坐に氛氲たり）」、「搖」の字は一に「遙」に作る。李元紘「相思怨」（『全唐詩』卷108）「望月思氛氲、朱衾懶更熏（月を望みて思ひ氛氲たり、朱衾更に熏ずるに懶し）」。孫逖「春初送呂補闕往西岳勒碑得雲字（春初に呂補闕の西岳に往くを送りて碑に勒す、雲字を得たり）」（『全唐詩』卷118）「往來春不尽、離思莫氛氲（往來春尽さず、離思氛氲たる莫かれ）。氛氲のこの用法は、六朝の詩に既に用いられている。『玉台新詠』⁶ 卷八蕭子雲⁷「春望古意」「氛氲閨裏思、逶迤水上風（氛氲たり閨裏の思ひ、逶迤たり水上の風）。また鮑泉「和湘東王春日（湘東王の春日に和す）」（『玉台新詠』卷八）「新愁誰解顏、新思獨氛氲（新愁 誰か顔を解かん⁸、新思 独だ氛氲たり）」。（高橋）

3. 分 fēn

①予想することば。劉長卿「客舍喜鄭三見寄（客舎にて鄭三の寄せらるるを喜ぶ）」（『全唐詩』卷151）「北中分与故交疏、何幸仍迴長者車（北中故交と疏なるを分るに、何ぞ幸いにも仍お長者の車を迴らさん）」、昔なじみとは疎遠になったと自ら考えたという。方干「東溪別業寄吉州段郎中（東溪の別業にて吉州の段郎中に寄す）」（『全唐詩』卷648）「豈分長岑寂、明時⁹有至公（豈に分らん岑寂の長きを、明時 至公有らん）」、「豈分」は「豈に料らん」である。王昌齡「西宮秋怨」（『全唐詩』卷143）「誰分含啼掩秋扇、空懸明月待君王（誰か分らん啼を含みて秋扇を掩うを、空しく明月懸かりて君王を待つ）。錢起「長信怨」（『全唐詩』卷239）「誰分昭陽夜歌舞、君王玉輦正淹留（誰か分らん 昭陽夜の歌舞、君王 玉輦 正に淹留せんとは）。杜甫「大曆三年春白帝城放船出瞿塘峡久居夔府將適江陵漂泊有詩凡四十韻（大曆三年春、白帝城より船を放ち、瞿塘峡を出づ。久しく夔府に居りて將に江陵に適かんとす、漂泊して詩有り凡そ四十韻）」（『全唐詩』卷232）「此生遭聖代、誰分哭窮途（此の生 聖代に遇うも、誰か分らん窮途に哭するを）」は全て「誰分」といい、等しく「誰か料らん」というのに同じ。また『詩詞曲語辭辭典』224頁「不分」の項も見よ。

②甘んじるとのことば。元稹「酬樂天見憶兼傷仲遠（樂天に憶わるるに酬い、兼ねて仲遠を傷む）」（『全唐詩』卷403）「与君皆直慙、須分老泥沙（君と皆直慙⁹なれば、須く泥沙に老ゆるに分んずるべし）」、まさに

在野で老いてゆくのだという。また元稹「獻榮陽公詩五十韻（榮陽公に献ずる詩五十韻）」（『全唐詩』卷407）「瓦礫難追琢，芻蕘分棄捐（瓦礫は追琢し難く，芻蕘¹⁰は棄捐に分んず）」、まさに棄てられるのだという。また『詩詞曲語辭典』224頁「不分」の項を見よ。

③名詞で，情をいう。杜甫「秋日荆南述懷三十韻（秋日荆南にて懷いを述ぶ三十韻）」（『全唐詩』卷232）「昔承推獎分，愧匪挺生材（昔 推獎¹¹の分けを承けしも，挺生の材に匪¹²ざるを愧づ）。皇甫冉「上礼部楊侍郎（礼部の楊侍郎に上る）」（『全唐詩』卷249）「道浅猶懷分，時移但自驚（道浅くして猶お分けを懷い，時移りて但だ自ら驚く）。司空曙「喜外弟盧綸見宿（外弟盧綸の宿に見わるるを喜ぶ）」（『全唐詩』卷293）「平生自有分，況是蔡家親（平生自ら分け有り，況んや是れ蔡¹³の家親をや）。柳宗元「韓漳州書報徹上人亡因寄二絕（韓漳州が書もて徹上人の亡くなりしを報ず，因りて二絶を寄す）」（『全唐詩』卷352）「早歲京華聽越吟，聞君江海分逾深（早歲 京華に越吟を聴き，聞くならく 君 江海の分け逾いよ深しと）。元稹「感夢（夢に感ず）」（『全唐詩』卷402）「拔我塵土中，使我名字美。美名何足多，深分從此始（我を塵土の中より抜きて，我が名字をして美ならしむ。美名何ぞ多とするに足らん，深き分け 此より始まる）。このほかに『詩詞曲語辭典』220頁「分」の項も見よ。

【不分】bùfèn ①意わず，或いは料らず。駱賓王「秋晨同淄川毛司馬秋九詠（秋晨 淄川の毛司馬と共にす秋九詠）」秋風（『全唐詩』卷78）「不分君恩絕，紈扇曲中秋（分わざりき君恩絶えんとは，紈扇 曲中 秋なり¹²）。崔湜「婕妤¹³怨」（『全唐詩』卷20）「不分君恩斷，新妝視鏡中（分らざりき君恩斷えんとは，新妝 鏡中を視る）。白居易「酬舒三員外見贈長句（舒三員外の長句を贈られしに酬ゆ）」（『全唐詩』卷454）「已判到老為狂客，不分當春作病夫（已に判す 老に到りて狂客と為るを，分わざりき春に当たりて病夫と作らんとは）。『詩詞曲語辭典』220頁「分」①の項を見よ。

②納得しない，不満に思う，不平等である等の意。白居易「元和十三年淮寇未平詔停歲仗憤然有感率爾成章（元和十三年，淮寇未だ平がず。詔して歲仗を停む。憤然として感有り，率爾として章を成す）」（『全唐詩』卷439）「不分氣從歌裏發，無明心向酒中生（分んぜざるの氣は歌裏より發し，無明の心は酒中に向いて生ず）」，不分の氣は，納得しないというようなもの。『詩詞曲語辭典』220頁「分」②の項を見よ。

【不忿】bùfèn 「不分」の②に同じ。杜甫「送路六侍御入朝（路六侍御の入朝するを送る）」（『全唐詩』卷227）「不分桃花紅似¹⁴錦，生憎柳絮白於綿（分んぜず桃花の紅の錦に似るを，生憎や柳絮は綿より白し）」，「分」は一に「忿」に作る。李端「閨情」（『全唐詩』卷286）「月落星稀天欲明，孤灯未滅夢難成。披衣更向門前望，不忿朝來鵲喜聲（月落ち星稀にして天明けんと欲す，孤灯未だ滅えずして夢成り難し。衣を披て更に門前に向いて望み，忿んぜず朝來鵲喜の聲）」，門の前にたたずんで眺めていても，夫が帰ってくる姿は見えず，鵲の聲が虚しく吉報を知らせるのを恨むという。

【不憤】bùfèn 「不分」の②に同じ。

④『南史』卷二十二・王僧虔伝「庾征西翼書，少時与右軍齊名，右軍後進，庾猶不分庾（庾征西翼の書，少き時右軍と名を齊しくす，右軍後に進められ，庾は猶お分んぜず）」，これより，この字はもともと「不分」に作っていたことがわかる。しかし「不忿」は「不憤」と音が近いことから，「不憤」をそのまま用いた。また現在の口語にもなお「氣不憤（腹立たしい）」あるいは「氣而不憤（腹立たしい）」の語があるのは，まさにこれに拠る。（高橋）

4. 分外 fènwài

①慣例通例から外れた，特殊，過剰というようなもの。多くは形容詞で述語となる。皇甫湜「題浯溪石（浯溪石に題す）」（『全唐詩』卷369）「次山有文章，可惋只在碎。然長於指叙，約潔有余態。心語適相應，出句多分外（次山に文章有り，惋むべきは只だ碎に在り。然して指叙に長じ，約潔なること余態有り。心に語れば相い応ずるに適い，句を出だせば分外多し）。『敦煌變文補編』¹⁵「双恩記」「（庫藏臣）遂啓白王曰，『太子取宝

布施貧窮，自数月来，三分已一。不敢遮障，合具奏聞。請王誠（誠）之，勿令分外』（〔庫藏の臣〕遂に白王に啓して曰く「太子宝を取りて貧窮に布施し，数月より来，三分して已に一となる。敢て遮障せず，合に具に奏聞すべし。請う王の之を誠め，分外とならしむる勿らんことを」と）。この例の「分外」は名詞で，目的語となっている。

②本分ではないことをいう，分にあらずというようなもの。（高橋）

5. 扶 fú

動詞で，縁る，沿う。蘇頌「奉和聖製途次旧居应制（聖製 途に旧居に^{やど}次るに奉和す 应制）」（『全唐詩』卷74）「約川星罕駐，扶道日旂舒（川に^そ約いて星罕駐まり，道に^そ扶いて日旂舒たり）」，約川とは川に沿うというようなもの，「星罕」は旗の名。沈佺期「送金城公主適西蕃应制（金城公主の西蕃に^ゆ適くを送る 应制）」（『全唐詩』卷96）「金榜扶丹掖，銀河属紫闥（金榜は丹掖に^そ扶い，銀河は紫闥に^つ属く）」，金榜は金でできた額，丹掖とは宮牆である。これは金榜が宮牆にそって掲げられていることをいい，王涯「宮詞」（『全唐詩』卷346）「雕牆¹⁶不断接宮城，金榜皆書殿院名（雕牆断ぜず宮城に接す，金榜皆な書す殿院の名）」の意味に同じ。韓愈「城南聯句」（『全唐詩』卷791）「皋区扶帝壤，環蘊郁天京（皋区は帝壤に^そ扶い，環蘊は天京を^さ郁んにす）」，皋区はすなわち「奥区神皋」のことで¹⁷，肥田沃土を指す。帝壤は帝都を指す。上の句は京城の四方は沃土であるという。この意味は既に六朝の詩文にもある。陸機「答張士然（張士然に^こ答う）」（『文選』卷24）「回渠繞曲陌，通波扶直阡（回渠は曲陌を繞り，通波は直阡に^そ扶う）」。鮑照「結客少年場行」（『文選』卷28）「扶宮羅將相，夾道列王侯（宮に^そ扶いて將相羅なり，道を夾みて王侯列す）」。陶淵明「桃花源記」（『全上古三代秦漢三國六朝文』¹⁸全晉文卷111）「既出，得其船，便扶向路，處處誌之（既に出でて，其の船を得，便ち向の路に^そ扶い，處處に之を誌す）」，扶は沿うの意味である。「便扶向路」の「扶」を，一般の注釈書では「沿う」と注するが，ただ上下の文脈から理解できるのみで有力な根拠がないし，さらになぜ「扶」に沿うという意味があるのかの説明もない。実は，六朝と唐代の詩歌中にはこの意味の用例が多く見える。扶が沿うという意味を持つのは，援助するという本義とは無関係で，“本無其字（もともとこの意味を表す字が無かった）”のために字を借りたというタイプの仮借字である。扌の字に作っても良い，扌には「近い」という意味があり，「沿う」という意味もある。白居易「余杭形勝（余杭の形勝）」（『全唐詩』卷443）「繞郭荷花三十里，扌城松樹一千株（郭を繞る荷花三十里，城に扌う松樹一千株）」とある。扶と扌は音が近く，六朝時代に「扶」に新しく「縁る」の意味を表す口語が生まれると，扶を用いても，扌を用いても良くなった。（高橋）

6. 扌 fú

近くに迫る，ここから「経過する」の意味。李白「陌上贈美人（陌上にて美人に贈る）」（『全唐詩』卷184）「駿馬驕行踏落花，垂鞭直扌五雲車（駿馬驕行して落花を踏み，鞭を垂れて直だ扌る 五雲車）」。杜甫「大曆三年春白帝城放船出瞿塘峡久居夔府将適江陵漂泊有詩凡四十韻（大曆三年春，白帝城より船を放ち，瞿塘峡を出づ。久しく夔府に居りて将に江陵に^ゆ適かんとす，漂泊して詩有り凡そ四十韻）」（『全唐詩』卷232）「前聞辨陶牧，轉眄扌宜都（前に聞けば陶牧を辨じ，^{うた}轉た眄れば宜都に扌る）」，以上は迫る，近寄るの意味。李白「尋陽送弟昌峒鄱陽司馬作（尋陽にて弟の昌峒鄱陽司馬を送るの作）」（『全唐詩』卷177）「松門扌中道，石鏡迴清光（松門 中道を扌ぎ，石鏡 清光を迴らす）」，道の途中で松門（地名）を過ぎるという意味。王維「留別山中温古上人兄并示舍弟緝（山中の温古上人の兄に留別し，並びに舍弟緝に示す）」（『全唐詩』卷125）「荊扉但灑掃，乘閑當過扌¹⁹（荊扉但だ灑掃すれば，閑に乗じて當に過扌すべし）」，過扌とは経過するの意味である。以上が経過するという意味の用例である。また「扌曙」の項を見よ。

【扌曙】 fúshǔ 夜明け。この語は南北朝と唐代の詩にある。庾信「対蠟賦」（『全上古三代秦漢三國六朝文』全後周文卷九）「蓮帳寒檠窗扌曙，筠籠熏火香盈絮（蓮帳 寒檠 窗に扌曙あり，筠籠 熏火 香 絮に盈つ）」，王維「扶南曲歌詞」五首・其四（『全唐詩』卷125）「扌曙朝前殿，玉墀多珮声（扌曙 前殿に^{むか}朝いて，玉墀 珮声多し）」。「扌」の項を見よ。（高橋）

7. 俯 fǔ

俯の字は『説文解字』には見えない。『玉篇』²⁰人部に「俯, 謂下首也 (俯は, 首を下ぐるを謂う)」, つまり頭を下げるの意味である。唐宋の詩詞中の「俯」は, しばしば近寄る, 接近するという意味をあらわす。王勃「聖泉宴」(『全唐詩』卷56)「披襟乘石磴, 列籍俯春泉 (襟を披きて石磴に乘じ, 籍を列ねて春泉に俯る)」。『全唐詩』卷65²¹の注には「籍, 一作席 (籍, 一に席に作る)」という, 按ずるに「席」に作るのは正しく, 『文苑英華』に収めるこの詩はまさに「席」に作っている。「列籍俯春泉」は, 泉のそばで宴を設けること。駱賓王「夏日遊德州贈高四 (夏日 德州に遊びて高四に贈る)」(『全唐詩』卷77)「日觀鄰全趙, 星臨俯旧吳 (日觀 全趙を鄰とし, 星臨 旧吳に俯る)」, 陳熙晋『駱臨海集箋注』²²の注に「德州係齊北地, 近趙, 駱籍婺州, 於三国時属吳, 故曰『隣全趙, 俯旧吳』也 (德州は齊北の地に係り, 趙に近し, 駱は婺州に籍す, 三国の時に於いて吳に属するが故に「全趙を隣とし, 旧吳に俯る」と曰うなり)」, 俯と隣とは互文で, ともに接近するの意味。杜甫「堂成 (堂成る)」(『全唐詩』卷226)「背郭堂成蔭白茅, 緣江路熟俯青郊 (背郭 堂成りて白茅に蔭わる, 緣江 路熟して青郊に俯る)」, 意味はまた同じ。『全唐詩』卷158張巡「聞笛 (笛を聞く)」「岩峽試一臨, 虜騎附城陰 (岩峽 一臨を試みれば, 虜騎 城陰に附る)」, 「附」の字の下に注して「一作俯 (一に俯に作る)」と云う。按ずるに陸游『避暑漫鈔』²³張睢陽詩の条では, ちょうど「俯」に作っている。俯と附とは通じており, ともに近づくの意味を表すことが分かる。李商隱「晚晴」(『全唐詩』卷540)「深居俯夾城, 春去夏猶清 (深居 夾城に俯り, 春去りて夏猶お清し)」。『全唐詩外編』²⁴58頁第二編『敦煌唐人詩集殘卷』に馬云奇の一詩を載せて, 題を「俯吐蕃禁門觀田判官贈向將軍真言口号」とする。あるひとが注を付して「俯」はここでは吐蕃を蔑視する意味があるとみなすが, 誤解である。「俯吐蕃禁門」とは吐蕃の禁門に近づいたという意味で, ここから壁上に題する詩だとわかる。また『詩詞曲語辭典』228頁「俯近」の項を見よ。(高橋)

8. 復 fù

①接続詞。動詞と形容詞に繋がる場合, 意味は「且つ」に同じ。または「或いは」の意味に同じ。名詞に繋がるときは「与 (〜と)」の意味に同じ。王維「答張五弟 (張五弟に答う)」(『全唐詩』卷125)「不妨飲酒復垂釣, 君但能來相往還 (酒を飲み復つ釣を垂るるを妨げず, 君但だ能く來たらば相い往還せん)」。杜甫「暮歸 (暮れに歸る)」(『全唐詩』卷232)「霜黃碧梧白鶴棲, 城上擊柝復烏啼 (霜は碧梧を黃ばましめて白鶴棲み, 城上 柝を撃ちて復つ烏啼く)」。岑參「赴犍為經龍閣道 (犍為に赴きて龍閣道を經)」(『全唐詩』卷198)「江路險復永, 夢魂愁更多 (江路 險しく復つ永し, 夢魂 愁うること更に多し)」, 以上の意味は「且つ」に同じ。王維「紅牡丹」(『全唐詩』卷128)「綠艷閑且靜, 紅衣淺復深 (綠艷閑にして且つ靜なり, 紅衣淺く復いは深し)」。杜甫「羌村」三首其三 (『全唐詩』卷217)「手中各有携, 傾榼濁復清 (手中各おの携うる有り, 榼を傾くれば濁 復いは清)」, 以上の意味は「或いは」に同じ。王維「愚公谷」三首其一 (『全唐詩』卷126)「寧問春將夏, 誰論西復東 (寧ぞ問わん春將夏と, 誰か論ぜん西復東)」, 將の意味は与の意味に同じ。『詩詞曲語辭典』746頁「与」の項を見よ。杜甫「自瀼西荆扉且移居東屯茅屋 (瀼西の荆扉より且く居を東屯の茅屋に移す)」四首其二 (『全唐詩』卷229)「東屯復瀼西, 一種住清溪²⁵ (東屯復瀼西と, 一種 清溪に住む)」, 一種とは「同様」という意味である。岑參「送鄭堪歸東京汜水別業 (鄭堪が東京の汜水の別業に歸るを送る)」(『全唐詩』卷200)「對酒風与雪, 向家河復閑 (酒に對せば風と雪と, 家に向えば河復閑)」, 以上の意味は与と同じ。

②且つ, 又た。常に副詞の「忽ち」, 「且つ」と連ねて用いる。李白「行路難三首」其一 (『全唐詩』卷162)「閑來垂釣碧溪上, 忽復乘舟夢日辺 (閑來釣を垂る 碧溪の上, 忽ち復た舟に乗りて日辺を夢む)」。杜甫「垂老別 (垂老の別れ)」(『全唐詩』卷217)「孰知是死別, 且復傷其寒 (孰んぞ知らん是れ死別なるを, 且つ復た其の寒からんことを傷む)」, この意味の用例はよく見られる。

③副詞, 形容詞或いは接続詞の後に置かれる。「始復めて」「已復に」「空復しく」「況復んや」「雖復い」など。このとき「復」は既に虚詞化して添えるだけとなる。李白「江上秋懷 (江上にて秋を懷う)」(『全唐詩』卷183)「山蟬号枯桑, 始復知天秋 (山蟬枯桑に号び, 始復めて知る天の秋)」。李白「寄遠 (遠きに寄す)」十一首 其四 (『全唐詩』卷184)「青春已復過, 白日忽相催 (青春已復に過ぎ, 白日忽ち相い催す)」。李頎「登

首陽山謁夷齊廟（首陽山に登りて夷齊廟に謁す）」（『全唐詩』巻132）「寂寞首陽山，白雲空復多（寂寞たる首陽山，白雲空復しく多し）」李白「陌上桑」（『全唐詩』巻165）「使君且不顧，況復論秋胡（使君且く顧みず，況復んや秋胡を論ずるをや）」郭震「宝剑篇」²⁶（『全唐詩』巻66）「雖復沈²⁷埋無所用，猶能夜夜氣衝天（雖復い沈埋せられて用うる所無きも，猶お能く夜夜 氣 天を衝く）」。

〔復却〕 fùquè 二字あわせて復の意味。杜甫「羌村」三首其二（『全唐詩』巻217）「嬌兒不離膝，畏我復却去（嬌兒膝を離れず，我の復却た去るを畏る）」，復却は連ねて用いる語で，ともに「復」の意味である。また去るという意味ではない。（高橋）

9. 假 jiǎ

須（もちいる），「不暇」は無須（～するに及ばない），不必（～する必要が無い）の意味。「假」は本来「頼る」の意味で，このような状況下で多くは虚字化して助動詞となる。李白「送張遙之壽陽幕府（張遙の壽陽幕府に之くを送る）」（『全唐詩』巻176）「不假築長城，大賢在其間（長城を築くに假^{およ}ばず，大賢 其の間に在り）」李商隱「洞庭魚」（『全唐詩』巻540）「洞庭魚可拾，不假更垂簪（洞庭の魚は拾うべし，更に簪^{あみ}を垂らすに假^{およ}ばず）」胡曾「赤壁」（『全唐詩』巻647）「交兵不假揮長劍，已挫英雄百萬師（兵を交えて長劍を揮うに假^{およ}ばず，已に英雄 百万の師を挫く）」駱賓王「夏日遊目聊作（夏日 目を遊ばせ聊かに作る）」（『全唐詩』巻77）「浦夏荷香滿，田秋麥氣清。詎假滄浪上，將濯楚臣纓（浦夏 荷香滿ち，田秋 麥氣清し。詎^{なん}ぞ假^{およ}ばん 滄浪の上，將に楚の臣纓を濯わんとす）」。

〔何假〕 héjiǎ 反語の句に用いられ，否定を表し，無須（～するに及ばない），不必（～する必要が無い）の意味。崔顥「相逢行」（『全唐詩』巻130）「使君何假問，夫婿大長秋（使君 何ぞ問うに假^{およ}ばん，夫婿 大長秋）」李德裕「伊川晚眺」（『全唐詩』巻475）「漢儲何假終南客，用里先生在谷中（漢儲何ぞ終南の客に假^{およ}ばん，用里先生 谷中に在り）」。

〔暇〕 xiá 「假」と同じ。通常の「閑暇」「空暇」の意味と異なる。李嶠「梅」（『全唐詩』巻60）「若能遙止渴，何暇泛瓊漿（若し能く遙かに渴きを止めれば，何ぞ瓊漿を泛ぶに暇^{およ}ばん）」。意味は梅を見ればどの渴きを止めることができるので，どうして酒を飲む必要があろうか。李德裕「思山居一十首 題寄商山石」（『全唐詩』巻475）「聊用支琴尾，寧惟倚病身。自知來處所，何暇問嚴遵（聊かに用いて琴尾を支え，寧ろ惟だ病身に倚る。自ら知る 處所に來たれば，何ぞ嚴遵に問うに暇^{およ}ばん）」もどうして問う必要があろうかといひ，上句の詩意が明らかに見える。

㊟「假」は「暇」と通用し，漢魏からすでにある。中華書局校点本『王粲集』²⁸「登樓賦」に「登茲樓以四望兮，聊暇日以銷憂（茲の樓に登りて以て四に望み，聊か暇日以て憂いを銷す）」とある。『五臣注文選』巻6は「暇日」を「假日」に作り²⁹，意味はこの時を仮（かり）ること。『說苑』巻14「至公」に「秦始皇欲行禪讓，博士鮑白令之說曰，“陛下所謂自營僅存之主也，何暇比德五帝，欲官天下哉³⁰”（秦始皇 禪讓を行なわんと欲し，博士の鮑白令之 説いて曰はく，“陛下は所謂自營して僅かに存するの主なり，何をか暇^かりて徳を五帝に比し，天下を官せんと欲するかな”と）」とある，「何暇」も「何必」「何須」である。（有木）

10. 假若 jiǎruò

①例え，例えば。比喩あるいは挙例に用いられ，仮に～の意味ではない。

②連詞。讓歩関係を表す。たとえ～でも，よしんば～でも。

〔假如〕 jiǎrú ①例え，例えば。

②縱然，即使（たとえ）。白居易「病中詩十五首 病中五絶句」其二（『全唐詩』巻458）「方寸成灰鬢作糸，

假如強健亦何為 (方寸は灰と成り 鬢は糸と作る, 假如い強健なるも亦た何をか為さん)。たとえ頑丈でも, という意味。韓愈「寄盧仝 (盧仝に寄す)」(『全唐詩』卷340)「先生抱才終大用, 宰相未許終不仕。假如不在陳力列, 立言垂範亦足恃 (先生 才を抱きて終に大いに用られん, 宰相未だ許さざれば終に仕えず。假如い力を陳ぶる列に在らずとも, 言を立て範を垂るることも亦た恃むに足れり)」。

〔假使〕 jiǎshǐ 縱然, 即使 (たとえ)。『盧照隣集』³¹ 卷4「五悲 悲窮通」に「君徒見邱中之饒朽骨, 豈知陌上之有遊魂。假使百年兮上寿, 又何足以存存 (君 徒らに見る 邱中之れ朽骨を饒かにし, 豈に知らん 陌上之れ遊魂有るを。假使い百年にして上寿となれば, 又何ぞ足らん 以て存存たるに)」。白居易「凶宅」(『全唐詩』卷424)「假使居吉土, 孰能保其躬 (假使い吉土に居るとも, 孰か能く其の躬を保たん)」。 (有木)

11. 間 jiān

名詞, 方向と時間を表し, 「辺」「前」「時」などの意味を表す。李白「広陵贈別³²」(『全唐詩』卷174)「繫馬垂楊下, 銜盃大道間 (馬を繫ぐ垂楊の下, 盃を銜む大道の間)」。また「感遇四首」其一 (『全唐詩』卷183)「挙手³³白日間, 分明謝時人 (手を挙ぐ 白日の間, 分明 時人に謝す)」。以上は「辺」の意味。李白「日夕山中忽然有懷 (日夕 山中忽然として懷い有り)」(『全唐詩』卷182)「月銜樓間峰, 泉漱階下石 (月は樓の間の峰を銜み, 泉は階の下に石に漱ぐ)」。また「金門答蘇秀才 (金門 蘇秀才に答う)」(『全唐詩』卷178)「鳥吟簷間樹, 花落窓下書 (鳥は吟ず 簷の間の樹, 花は落つ 窓の下に書)」。以上は「前」の意味。杜甫「杜鵑」(『全唐詩』卷221)「今忽暮春間, 值我病經年 (今忽ち暮春の間, 我が病みて年を経るに値う)」。杜甫「八哀詩 贈秘書監江夏李公邕 (秘書監江夏の李公邕に贈る)」(『全唐詩』卷222)「分宅脫驂間, 感激懷未濟 (宅を分け驂を脱するの間, 感激するも未だ濟らざるを懷う)」。 「宅を分け驂を脱する」とは他の人を援助すること。をいう。両句の大意は李邕が財産を振る舞うほど気がいいが, 彼の気概として心が未だ満足しないこと。杜甫「奉送魏六丈佑少府之交広 (魏六丈佑少府の交広に之くを送り奉る)」(『全唐詩』卷223)「心事披寫間, 氣酣達所為 (心事披寫の間, 氣酣にして為す所に達す)」。両句の大意は魏佑が交広へ来てその胸中の思いを表出する時に, 思いのたけを尽くして打ち明けること。杜甫「遠遊」(『全唐詩』卷230)「雁矯銜蘆內, 猿啼失木間 (雁は矯る 蘆を銜む内, 猿は啼く 木を失う間)」。両句の大意は雁が蘆を銜えて翼を広げて飛び, 猿は木から落ちた時に哀しく啼くこと。以上はみな「時」の意味。 (有木)

12. 兼 jiān

①副詞, 頗 (すこぶる), 甚 (はなはだ)。韓偓「秋深閑興」(『全唐詩』卷680)「此心兼笑野雲忙, 甘得貧閑味甚長 (此の心兼だ笑う野雲の忙, 貧閑に甘んじ得て味甚だ長し)」。これは首聯にかかり, 「兼」は「又」の意味にすることは不可能であり, 「兼笑」はとても笑うこと。荊浩「画山水図答大愚 (山水図を画きて大愚に答う)」(『全唐詩』卷727)「岩石噴泉窄, 山根到水平。禪房時一展, 兼称苦空情 (岩石 噴泉窄く, 山根 水平に到る。禪房 時に一たび展き, 兼だ苦空の情に称う)」。絵を描く思いは仏教の苦行のつらさととても似ているという意味。秦韜玉「問古」(『全唐詩』卷670)「大底榮枯各自行, 兼疑陰鷲也難明 (大底 榮枯各おの自行われ, 兼だ疑う陰鷲も也た明らかにし難しと)」。

②全 (すべて), 絶 (たえて)。王績「晩年敘志示翟処士 (晩年に志を叙し翟処士に示す)」(『全唐詩』卷37)「弱齡慕奇調, 無事不兼修。望氣登重閣, 占星上小樓。明經思待詔, 學劍覓封侯 (弱齡 奇調を慕い, 無事 兼て修めず。氣を望みて重閣に登り, 星を占いて小樓に上がる。明經 待詔を思い, 劍を學びて封侯を覓む)。「兼修」は「全修 (すべて修める)」「尽修 (ことごとく修める)」。張九齡「巡按自灘水南行 (巡按して灘水より南行す)」(『全唐詩』卷47)「即事聊獨飲, 素懷豈兼適 (即事聊かに独り飲び, 素より懷う 豈に兼てに適せんやと)」。白居易「与夢得偶同到敦詩宅感而題壁 (夢得と偶同に敦詩宅に到り, 感じて壁に題す)」(『全唐詩』卷456)「園荒唯有薪堪採, 門冷兼無雀可羅 (園は荒れて唯だ薪のみ採るに堪うる有り, 門は冷たく兼て雀の羅すべき無し)。「兼」は「独」「唯」と対になる。また「自題」(『全唐詩』卷450)「熱月無堆案, 寒天不趁朝。傍看心寂寞, 自覺甚逍遙。徒對盈尊酒, 兼無愁可銷 (熱月にも堆案無く, 寒天にも朝に趁かず。

傍らより看れば応に寂寞たるべきも、自らは甚だ逍遥たるを覚ゆ。徒だ尊に盈つる酒に対し、兼えて愁いの銷すべき無し)。王駕「雨晴」(『全唐詩』巻690)「雨前初見花間蕊, 雨後兼無葉裏花。蛺蝶飛來過牆去, 却疑春色在隣家(雨前 初めて花間の蕊を見, 雨後 兼えて葉裏の花無し。蛺蝶飛び来たりて牆を過ぎて去り, 却って疑う 春色 隣家に在るを)」。兼無は全無(全く無い)あるいは絶無(絶えて無い)であり, 花蕊が風に吹かれ雨に打たれてすべて落ちること。錢起「暇日覽旧詩因以題詠(暇日 旧詩を覽て因りて以て題詠す)」(『全唐詩』巻239)「有寿亦將帰象外, 無詩兼不恋人間(寿有れば亦た將に象外に帰せんとし, 詩無くんば兼えて人間に恋わず)」。吳融「春帰次金陵(春歸りて金陵に次す)」(『全唐詩』巻687)「跡疏冠蓋兼無夢, 地近鄉園自有情(跡は冠蓋に疏く兼えて夢無く, 地は鄉園に近く自ら情有り)」。 (有木)

13. 見 jiàn

①被、及(～らる)。李白「讀諸葛武侯伝書懷贈長安崔少府叔封昆季(諸葛武侯伝を読み, 懷いを書して長安の崔少府叔封昆季に贈る)」(『全唐詩』巻168)「何人先見許, 但有崔州平(何人を先ず許さる, 但だ崔州平有るのみ)」。また「贈新平少年(新平の少年に贈る)」(『全唐詩』巻168)「故友不相恤, 新交寧見矜(故友 相い恤^{あわれ}まず, 新交 寧ろ矜^{あわれ}まれむや)」。杜甫「陪鄭広文遊何將軍山林十首(鄭広文に陪し, 何將軍の山林に遊ぶ十首)」其一(『全唐詩』巻224)「谷口旧相得, 濠梁同見招(谷口旧とより相い得, 濠梁同に招かる)」。また「入衡州(衡州に入る)」(『全唐詩』巻223)「報主身已老, 入朝見病妨(主に報いるに身は已に老い, 朝に入らんとするも病にて妨げらる)」。劉禹錫「有鰕吟」(『全唐詩』巻355)「有鰕得嘉魚, 自謂天見憐(鰕有れば嘉魚を得, 自ら謂う天憐れらる)」。韓愈「驚驥」(『全唐詩』巻337)「有能必見用, 有德必見収(能有れば必ず用いられ, 徳あれば必ず収めらる)」。

②聞く。李白「上李邕(李邕^{たてまつ}に上る)」(『全唐詩』巻168)「世人見我恒殊調, 見^き余大言皆冷笑(世人 我が恒に調を殊にするを見き, 余が大言を見て皆冷笑す)」。言は「見」することができる。韋應物「与村老対飲(村老と対飲す)」(『全唐詩』巻186)「鄉村年少生離乱, 見話先朝如夢中(乡村の年少離乱に生じ, 話を見く先朝 夢中の如し)」。話もまた「見」することができる。白居易「重題」其一(『全唐詩』巻439)「從茲耳界應清浄, 免見啾啾毀譽声(茲より耳界 應に清浄なるべし, 見くを免れん啾啾たる毀譽の声)」。声もまた「見」することができる。李白「梁甫吟」(『全唐詩』巻162)「君不見朝歌屠叟辞棘津, 八十西來釣渭濱(君見かずや 朝歌の屠叟 棘津を辞し, 八十西に來たりて渭濱に釣す)」。また前の句に「君不見高陽酒徒起草中, 長揖山東隆準公(君見かずや 高陽の酒徒 草中に起こり, 長揖す山東の隆準公)」という。また「行路難三首」其三(『全唐詩』巻162)「君不見吳中張翰称達生, 秋風忽憶江東行(君見かずや 吳中の張翰 達生と称す, 秋風忽ち憶う江東の行)」。およそこの周漢晋時代の事は、李白の時にはこれを「見」することができなかった。杜甫「杜鵑行」(『全唐詩』巻219)「君不見昔日蜀天子, 化作杜鵑似老烏(君見かずや 昔日の蜀天子, 化して杜鵑と作り老烏に似たり)」。この古代の事は杜甫の時代にこれを「見」することができなかった。

③知る。覚える。李賀「感諷六首」其五(『全唐詩』巻394)「本無辞輦意, 豈見入空宮(本と輦を辞する意無くんば, 豈に空宮に入るを見るや)。「豈見」は豈に知るやをいう。本より寵愛を辞退することがないという意味をいい, どうしてかえって寵愛を失うことを知っていようか。

④得る, 着く。韓偓「春閨二首」其二(『全唐詩』巻683)「長吁解羅帶, 怯見上空牀(長吁して羅帶を解き, 空牀に上るを怯え見く)。「怯見」はおびえているの意味である。

⑤企図の語。元稹「病醉」(『全唐詩』巻411)「醉伴見儂因病酒, 道儂無酒不相窺(醉伴 儂の病酒に因るを見い, 儂に道うに酒無くんば相い窺わずと)」。この「見」字は想像の意味で, 酒飲み仲間が私の酒癖によって禁酒していると想像していることをいう。杜甫「石犀行」(『全唐詩』巻219)「但見元氣常調和, 自免洪涛恣凋瘵(但だ元氣常に調和せんと見せば, 自ら免る洪涛の凋瘵を恣にするを)」。この「見」字は希望の意味をなす。また「有懷台州鄭十八虔(台州の鄭十八虔を懷う有り)」(『全唐詩』巻218)「平生一杯酒, 見我故人遇。相望無所成, 乾坤莽回互(平生一杯の酒, 我を故人に遇せんと見す。相い望むも成す所無し, 乾坤莽として回互す)」。旧友と遇うことを冀い, 一杯の酒は飲びをいい, 望むところが成就しないに過ぎない。「望」字はまさに「見」字と対応する。張籍「寄王侍御(王侍御に寄す)」(『全唐詩』巻386)「見欲移居相近住, 有田多与種黃精(移居して相い近くに住まんと欲せんと見り, 田有れば多く与に黄精を種う)。「見欲」は「擬欲」と

同じ。李賀「南園十三首」其七（『全唐詩』卷390）「見買若耶溪水劍，明朝歸去事猿公（若耶溪水劍を買わんと見り，明朝歸り去って猿公に事えん）」。「見買」は「擬買」と同じ。賈島「題隱者居（隱者の居に題す）」（『全唐詩』卷574）「猶嫌住久人知處，見擬移家更上山（猶お嫌う住むこと久しくして人の處を知るを，家を移して更に山に上るを擬見る）」。「見」と「擬」は重言である。劉禹錫「題王郎中宣義里新居（王郎中宣義里の新居に題す）」（『全唐詩』卷359）「見擬移居作隣里，不論時節請開関（居を移して隣里と作らんと見擬り，時節を論ぜず関を開くを請う）」。吳融「寄貫休上人（貫休上人に寄す）」（『全唐詩』卷684）「見擬沃州尋旧約，且教丹頂許為隣（沃州に旧約を尋ねんと見擬り，且に丹頂をして隣と為るを許さしめんとす）」。陸龜蒙「正月十五惜春寄襲美（正月十五 春を惜みて襲美に寄す）」（『全唐詩』卷624）「無窮懶惰齊中散，有底機謀敵右侯。見織短篷裁小楫，拏煙閑弄箇漁舟（窮まる無し 懶惰せし齊中散，底有らば機謀 右侯に敵う。短篷を織らんと見りて小楫を裁ち，拏煙 箇の漁舟を閑弄す）」。「見織云々」は「擬織云々」のこと。また「襲美以魚牋見寄因謝成篇（襲美 魚牋を以て寄せらるに因りて謝して篇を成す）」（『全唐詩』卷624）「好將花下承金粉，堪送天邊詠碧雲。見倚小窓親襲染，尽囑春色寄夫君（好く花下を將って金粉を承け，堪えて送らん天邊 碧雲を詠ずるを。小窓に倚らんと見りて襲染に親しみ，尽く春色を囑りて夫君に寄す）」。「見倚云々」は「擬倚云々」のこと。

【見説】 jiànshuō 聞くらなく。王維「贈裴旻將軍（裴旻將軍に贈る）」（『全唐詩』卷128）「見説雲中擒點虜，始知天上有將軍（見説らく雲中點虜を擒にすと，始めて知る天上に將軍有るを）」。白居易「石榴樹」（『全唐詩』卷439）「見説上林無此樹，只教桃柳占年芳（見説らく上林 此の樹無し，只だ桃柳をして年芳を占めしむと）」。また「燕子樓三首」其三（『全唐詩』卷438）「見説白楊堪作柱，爭教紅粉不成灰（見説らく白楊 柱と作すに堪へたり，争か紅粉をして灰と成らざらしむる）」。元稹「燈影」（『全唐詩』卷412）「見説平時燈影裏，玄宗潛伴太真游（見説らく 平時 燈影の裏，玄宗 潜かに太真を伴いて遊ぶ）」。また「見説」の二字で熟語とするに限らない。張籍「（仙を尋ぬ）」（『全唐詩』卷386）「更見峰西幽客説，雲中猶有兩三家（更に見らく峰西の幽客の説，雲中 猶お兩三家有り）」。（有木）

14. 那 nǎ

①副詞。況（いわんや）・又（また）・兼之（之を兼ねるに）・更加（さらに）。語を繋ぎ合わせる作用を持ち，通常の指示代名詞或いは疑問代名詞となる用法ではない。沈佺期「答魍魎代書寄家人（魍魎に答え書して家人に寄するに代う）」（『全唐詩』卷97）「抱愁那去国，將老更垂裳（愁いを抱きて那に国を去り，將に老いんとして更に裳に垂らんとす³⁵）」。「那」と「更」は互文。張九齡「庭梅詠」（『全唐詩』卷48）「朝雪那相妬，陰風已屢吹（朝雪 那に相妬み，陰風 已に屢しば吹く）」。「那」は「已」と対応し，風がすでにしきりに吹きつけるようになったのに，雪は更に（梅の花に）嫉妬する，と言うのである。朱放「經故賀賓客鏡湖道士觀（故の賀賓客の鏡湖道士觀を經）」（『全唐詩』卷315）「已得歸鄉里，逍遙一外臣。那隨流水去，不待鏡湖春（已に郷里に歸るを得て，逍遙たり 一外臣。那に流水に隨いて去り，待たず 鏡湖の春）」。「那」と「已」は対応しており，「那隨」は「更隨」である。楊凝「送客歸湖南（客の湖南に歸るを送る）」（『全唐詩』卷290）「情來偏似醉，淚迸不成流。那向蕭條路，綠湘篁竹愁（情來りて偏えに酔うに似て，淚迸るも流れを成さず。那に蕭條の路に向かい，湘に縁りて篁竹愁う）」。司空曙「殘鶯百囀歌同王員外耿拾遺吉中孚李端遊慈恩各賦一物（殘鶯百囀歌 王員外・耿拾遺・吉中孚・李端らとともに慈恩に遊び各おの一物を賦す）」（『全唐詩』卷293）「共愛奇音那可親，年年出谷待新春（共に奇音を愛すれば 那に親しむべく，年年谷を出でて 新春を待つ）」。また「那些」の項も見よ。

②疑問副詞。怎（いかでか）・怎麼（なぜ・どうやって）。多くは真性の疑問句に用いられ，そのため反語を表すものや，豈（あに～や）として解釈する用法とは区別される。杜甫「孟倉曹步趾領新酒醬二物滿器見遺老夫（孟倉曹 趾を歩ませ新たなる酒醬二物の器に満たせるを領し老夫に遺らる）」（『全唐詩』卷231）「理生那免俗，方法報山妻（生を理むるは那でか俗を免れん，方法 山妻に報ぜよ）」。劉長卿「酬秦系（秦系に酬ゆ）」（『全唐詩』卷147）「鶴書猶未至，那出白雲來（鶴書 猶お未だ至らざるに，那でか白雲を出でて來たれる）」。白居易「昭君怨」（『全唐詩』卷439）「見疏從道迷図画，知屈那教配虜庭（見ること疏なるは従い図画に迷え

りと道^いうも、知ること^{つまび}屈^{いか}かならば那でか虜庭に配せしめん)。いずれも怎免（どうして免れようか）・怎出（どうして出たのか）・怎教（どうして～されたのか）と言う意である。劉言史「放螢怨」（『全唐詩』巻468）「且逍遙，還酩酊。仲舒漫不窺園井。那将寂寞老病身，更就微虫借光影（且つ逍遙し，還た酩酊す。仲舒は漫ろに園井を窺わず。那でか寂寞老病の身を将て，更に微虫に就きて光影を借らんや）。徐凝「和白使君木蘭花（白使君の木蘭花に和す）」（『全唐詩』巻474）「見説木蘭征戍女，不知那作酒辺花（説くならく木蘭は征戍の女，知らず那でか酒辺の花と作るかを）。意味はいずれも同じ。

按ずるに「那」字のこの用法は六朝時代にはすでに存在していた。干宝『搜神記』巻20，第243条に「百姓相見，咸驚語，汝頭那忽戴魚（百姓相見て，咸な驚きて語う，汝の頭^{いか}那でか忽として魚を戴けるか，と）」³⁶。「那」のこの種の用法は六朝期の文献にも証拠を求める事が出来る。『南史』宋前廢帝紀に「太后疾篤，遣呼帝，帝曰，病人間多鬼，那可往（太后疾篤く，帝を呼ばしむるに，帝曰く，病人多鬼を間う，那でか往くべき，と）」³⁷。また「那得」「那更」「那些」の項目も見よ。

[那得] nǎdé 詩・詞・曲の中にはまた「那得」と言う語がよく見えるが，連語として豈能（豈に能く～せんや）あるいは哪能獲得（どうして出来るだろうか）と言った意を表すほかに，しばしば怎（いかでか）・怎麼（なぜ・どうやって）の意も表す。この時「那得」はもはや連語ではなく，一つの熟語と見なすべきである。白居易「山中戲問韋侍御（山中にて戯れに韋侍御に問う）」（『全唐詩』巻440）「我抱棲雲志，君懷濟世才。常吟反招隱，那得入山来（我は抱く 棲雲の志，君は懷く 濟世の才。常に反招隱を吟ぜるに，那得でか山に入りて来れる）。あなたは世を濟う志があり，また確かにその才能もあるのに，今どうして山に入って来て隠棲するのか，と言う意である。按ずるに「那得」のこの種の用法は六朝期の文献にも証拠を求める事が出来る。『南史』宋前廢帝紀に「太后怒，語侍者曰，将刀来破我腹，那得生寧馨兒（太后怒り，侍者に語げて曰く，刀を^も将ち来たりて我が腹を破け，那得でか^{いか}寧馨^{かくのことき}兒を生める，と）」³⁸。どうしてこんな道義に背く親不孝の子を産んでしまったのか，と言う意である。「那」の語義②を見よ。（大山）

15. 那堪 nǎkān

兼之（之を兼ねるに）の意である。本義の不堪（堪えず）とは異なる。王建「涼州行」（『全唐詩』巻298）「養蚕繰繭成匹帛，那堪繞帳作旌旗（蚕を養い繭を繰り匹帛を成し，那堪て帳を繞らせ旌旗を作る）。蚕を育てて絹の布を作り，兼ねて帳や旗を作る事を言う。（大山）

16. 那 nà

奈（なんぞ・いかん）である。李白「長干行二首」其の二（『全唐詩』巻163）「自憐十五余，顔色桃李紅。那作商人婦，愁水復愁風（自ら憐れむ十五余，顔色 桃李紅なり。那ぞ商人の婦と作りて，水を愁い 復た風を愁う）。「那作」は「奈作」であり，どうして商人の妻などになったのか，と言うのである。白居易「去歲罷杭州今春領吳郡慚無善政聊写鄙懷兼寄三相公（去歲杭州を罷め，今春吳郡を領するも，善政無きを慚じ，聊か鄙懷を写し兼ねて三相公に寄す）」（『全唐詩』巻447）「那将最劇郡，付与苦慵人。豈有吟詩客，能³⁹為持節臣（那ぞ最も劇なる郡を^{もつ}将て，^{はなん}苦だ慵なる人に付与せる。豈に吟詩の客の，能く持節の臣と為ること有らんや）。「那将」は「奈将」であり，どうして最も激務である郡をもって，最もものぐさな人間に与えたのか，と言うのである。杜甫「奉送郭中丞兼太僕卿充隴右節度使三十韻（郭中丞の太僕卿を兼ねて隴右節度使に充てらるるを送り奉る三十韻）」（『全唐詩』巻225）「漸衰那此別，忍淚独含情（漸く衰えて此の別れを那んせん，涙を忍びて独り情を含む）。「那此別」は「奈此別」であり，この別れをどうしようかと言う意である。また杜甫「北征」（『全唐詩』巻217）「那無囊中帛，救汝寒凜慄（那ぞ囊中の帛の，汝が寒くして凜慄たるを救う無からんや）。また杜甫「季秋蘇五弟纓江樓夜宴崔十三評事韋少府姪三首（季秋に蘇五弟纓が江樓にて夜崔十三評事・韋少府姪と宴す三首）」其の二（『全唐詩』巻231）「对月那無酒，登樓況有江（月に対して那ぞ酒無からんや，樓に登りて況んや江有るをや）。「那無」はいずれも「奈無」と言うようなものである。杜甫「奉寄高常侍（高常侍に寄せ奉る）」（『全唐詩』巻223）「汶上相逢年頗多，飛騰無那故人何（汶上に相逢うて年頗る多

し、飛騰して故人を那何とするも無し）。「那」は一に「奈」に作る。王維「酬郭給事（郭給事に酬ゆ）」（『全唐詩』卷128）「強欲從君無那老，將因臥病解朝衣（強いて君に従わんと欲するも老いを那とするも無く，將に病に臥するに因りて朝衣を解かんとす）」。「那」は一に「奈」に作る。高適「夜別韋司士得城字（夜韋司士に別る 城字を得）」（『全唐詩』卷214）「只言啼鳥堪求侶，無那春風欲送行（只だ言う啼鳥 侶を求む堪しと，那とするも無し 春風の行くを送らんと欲するを）」。王昌齡「從軍行七首」其の一（『全唐詩』卷143）「更吹羌笛關山月，無那金閨萬里愁（更に羌笛を吹く 關山の月，那とするも無し 金閨萬里の愁い）」。「無那」は全て「無奈」と言うようなものである。張籍「春別曲」（『全唐詩』卷382）「江頭橘樹君自種，那不長繫木蘭船（江頭の橘樹 君自ら種う，那ぞ長に木蘭の船を繫がざる）」。「那不」は「奈不」である。韋莊「山墅閑題」（『全唐詩』卷697）「有名不那無名客，獨閉衡門避建康（名有るも那ともせざるは無名の客の，獨り衡門を閉ざして建康を避くるを）」。「不那」は「不奈」である。白居易「強酒（強いて酒のむ）」（『全唐詩』卷438）「不然秋月春風夜，爭那閑思往事何（然らざれば秋月春風の夜，往事を閑思するを爭那何せん）」。「爭那」は「爭奈」である。韓偓「江樓二首」其の二「風光百計牽人老，爭那多情是病身（風光百計 人を牽きて老いしめ，多情是れ病身なるを爭那せん）」。「爭那」は「爭奈」である。崔塗「讀漢武內傳（漢武內傳を讀む）」（『全唐詩』卷679）「爭那白頭方士到，茂陵紅葉已蕭疏（白頭の方士の到るを爭那せん，茂陵の紅葉 已に蕭疏）」。

以上の「爭那」はいずれも「爭奈」であり、「怎奈」でもある。（大山）

17. 奈 nài

①耐える。「奈」・「耐」の2字は通用し，だから耐は奈であり，奈もまた耐である。杜甫「月」（『全唐詩』卷230）「斟酌姮娥寡，天寒奈九秋（斟酌す 姮娥の寡にして，天寒くして九秋に奈うるを）」。「奈」は一に「耐」に作り，寒さに耐える・秋に耐える事を言う。司空圖「退居漫題七首」其の一（『全唐詩』卷632）「花欠傷難綴，鶯喧奈細聽（花欠けて綴り難きを傷み，鶯喧しきも細かく聴くに奈う）」。「聴くに耐える事を言う。」

②对付（対処する）。（大山）

18. 奈何 nàihé

对付（対処する）・処分する。一般的に無辦法（どうしようもない）と解釈するものとは異なる。杜甫「江梅」（『全唐詩』卷232）「絕知春意好，最奈客愁何（絶だ知る 春意の好きを，最も客愁に奈何う）」。「奈」は「耐」に作り，寒さに耐える・秋に耐える事を言う。司空圖「退居漫題七首」其の一（『全唐詩』卷632）「花欠傷難綴，鶯喧奈細聽（花欠けて綴り難きを傷み，鶯喧しきも細かく聴くに奈う）」。「聴くに耐える事を言う。」

19. 耐 nài

①奈（いかな）。

②願望を表す語。寧（ねがわくば）・判（まかせる，拵或いは拵にも作る），また值得（～するに値する）。岑參「郡齋南池招楊麟（郡齋の南池に楊麟を招く）」（『全唐詩』卷200）「閑時耐相訪，正有床頭錢（閑時 耐わくば相訪ねよ，正に床頭の錢有り）」。「耐」は古は「能」に通じ，「能」もまた「寧」である。「能相訪」もまた（訪問を）願う意となる。また岑參「喜韓樽相過（韓樽の相過ざるを喜ぶ）」（『全唐詩』卷199）「三月瀟陵春已老，故人相逢耐醉倒（三月瀟陵 春已に老い，故人相逢いて 酔い倒）」。

るるに耐^まかす)。「耐^ま酔倒」は「寧^ま酔倒」であり、酔って倒れるのに任せる、或いは酔って倒れるに値する、と言う意である。また岑参「送楊子(楊子を送る)」(『全唐詩』卷200)「斗酒渭城辺、壚頭耐^ま酔眠(斗酒 渭城の辺、壚頭 酔いて眠るに耐す)」。李白「送殷淑三首(殷淑を送る 三首)」其の一(『全唐詩』卷176)「惜別耐^ま取酔、鳴榔且長謡(別れを惜しみては酔いを取るに耐^ませ、榔を鳴らして且つ長謡せん)。方干「金州客舍(金州の客舍)」(『全唐詩』卷648)「此情偏耐^ま酔、難遣酒罍閑(此の情 偏えに酔うに耐^ますも、遣り難し 酒罍の閑なるを)」。いずれの「耐^ま酔」も酔いに任せる、或いは酔っぱらう価値があると言う意であり、願望を表す語である。

③宜(適している)・称(かなう)・配(ふさわしい)。高適「広陵別鄭処士(広陵にて鄭処士に別る)」(『全唐詩』卷214)「溪水堪垂釣、江田耐^ま挿秧(溪水 釣を垂る堪く、江田 秧を挿すに耐^まし)。「耐^ま挿秧」は稲を植えるのに適しているの意である。杜甫「洗兵馬」(『全唐詩』卷217)「青春復随冠冕入、紫禁正耐^ま煙花繞(青春復た冠冕に随いて入り、紫禁正に煙花の繞るに耐^まう)。「正耐^ま」は、まさしく釣り合いが取れている、の意であり、宮殿が春景色にふさわしい事を言う。

〔頗^い奈〕pōnài 頗もまた不可(べからず)の切音⁴³である。盧仝「哭玉碑子(玉碑子を哭す)」(『全唐詩』卷387)「頗^い奈窮相驢、行動如跛鰲(奈ともすべからず 窮相の驢の、行動 跛鰲の如きを)」。また「月蝕」(『全唐詩』卷388)「頗^い奈蝦蟆兒、吞我芳桂枝(奈ともすべからず 蝦蟆兒の、我が芳桂の枝を吞む)。「耐」の語義①を見よ。(大山)

20. 耐可 nàikě

①那可(どうして出来ようか)。李白「陪族叔刑部侍郎曄及中書買舍人至遊洞庭湖 五首(族叔刑部侍郎曄及び中書買舍人至に陪して洞庭湖に遊ぶ 五首)」其の二(『全唐詩』卷179)「南湖秋水夜無煙、耐可乘流直上天。且就洞庭賒月色、將船買酒白雲辺(南湖の秋水 夜煙無きも、耐^{なん}ぞ流れに乗りて直ちに天に上るべけんや。且く洞庭に就きて月色を賒^{おきの}り、船を^{ひき}いて酒を^{なん}かう 白雲の辺)」。これは安得(安んぞ得んや)と言う意である。天に真っすぐ昇る事が出来ないから、ひとまず白雲の湧く辺りで酒を買おう、と言うのである。

②寧可(いっそのこと～したい)。李白「秋浦歌十七首」其の十二(『全唐詩』卷167)「水如一匹練、此地即平天。耐可乘明月、看花上酒船(水は一匹の練の如く、此地 平天に即く。耐^{ねがわ}くば明月に乗り、花を看んとして酒船に上るべし)」。王琦『李太白全集』の注に、「解為能可、云即寧可。此願辭也。猶云願得乘明月(解して能可と為す、云うところは即ち寧可なり。此れ願うの辭なり。猶お願わくば明月に乘ずるを得んと云うがごとし)」⁴⁴とある。劉長卿「赴宣州使院夜宴寂上人房留辭前蘇州韋使君(宣州の使院に赴き夜寂上人の房に宴し、辭を前の蘇州韋使君に留む)」(『全唐詩』卷148)「春婦花殿暗、秋傍竹房多。耐可機心息、其如羽檄何(春婦りて 花殿暗く、秋傍いて 竹房多し。耐^{ねがわ}くば機心の息むべくも、其れ羽檄を如何せん)」。これは名利を追ひ求め悪だくみをする心が止むのを願う事を言う。(大山)

21. 難為 nánwéi

難以(～するのが困難だ)。2音節の動詞であるが、語素である「為」はすでに実質的な意味を失いつつある。陶淵明「与殷晋安別(殷晋安と別る)」⁴⁵「飄飄西來風、悠悠東去雲。山川千里外、言笑難為因(飄飄たり 西來の風、悠悠たり 東去の雲。山川 千里の外、言笑 因づき難^{がた}為し)。「因」は「親」であり、親密に言葉を交わすのが困難である事を言うのである。杜甫「草堂」(『全唐詩』卷220)「弧矢暗江海、難為遊五湖(弧矢 江海を暗くし、五湖に遊び難^{がた}為し)」。また杜甫「九日寄岑参(九日岑参に寄す)」(『全唐詩』卷216)「寸歩曲江頭、難為一相就(寸歩にして 曲江の頭なるも、一たび相就くも難^{がた}為し)」。白居易「琵琶行」⁴⁶ (『全唐詩』卷435)「豈無山歌与村笛、嘔啞嘲哢難為聽(豈に山歌と村笛無からんや、嘔啞嘲哢として 聽^{がた}き難^{がた}為し)」。意味はいずれも同じ。また敦煌變文「太子成道經」⁴⁷に「大王何必多貪。求男是男、求女是女。一双難為求覓(大王何ぞ必ずしも多く貪らん。男を求むれば是れ男、女を求むれば是れ女なり。一双なるは求^{もと}覓^め難^{がた}為し)」とある。(大山)

22. 惱 nǎo

からかう。杜甫「奉陪鄭駙馬韋曲二首（鄭駙馬の韋曲に陪し奉る二首）」其の一（『全唐詩』卷225）「韋曲花無頼，家家惱殺人（韋曲 花は無頼，家家 人を悩殺す）。人をひどく挑発する事を言うのである。（大山）

23. 鬧 nào

①動詞。群がる・ひとかたまりになる。李商隱「洞庭魚」（『全唐詩』卷540）「洞庭魚可拾，不假更垂簪。鬧若雨前蟻，多於秋後蠅（洞庭 魚拾うべく，更に簪を垂るるを仮いず。鬧がること雨前の蟻の若く，秋後の蠅よりも多し）」。

また唐・宋代の口語の中には「鬧装」「鬧竿兒」の2語がある。白居易「渭村退居寄礼部崔侍郎翰林錢舍人詩一百韻（渭村退居 礼部崔侍郎・翰林錢舍人に寄する詩一百韻）」（『全唐詩』卷438）「貴主冠浮動，親王轡鬧装（貴主 冠は浮動，親王 轡は鬧装）」。「鬧装」は胡應麟『少室山房筆叢』卷21の以下の記述を引用する。「鬧装帶，余遊燕日嘗見於東市中。合衆寶雜綴而成，故曰鬧装（鬧装帶は，余 遊燕の日に嘗て東市の中に見る。衆寶を合わせて雜綴して成す，故に鬧装と曰う）」。「鬧竿兒」もまた様々な小道具を竹竿につなげた子供の玩具である。いずれも「鬧」にひとかたまりになると言う意味がある事の傍証となる。

②形容詞。凡そ物が群がり集まれば密度も高くなるので，「鬧」から派生して濃郁・濃密等の意となる。（大山）

24. 能 néng

①なぞらえて言う語。這樣（こんなにも）或いは如許（かくのごとく）である。張九齡「庭梅」（『全唐詩』卷48）「芳意何能早，孤榮亦自危（芳意 何ぞ能くも早き，孤榮 亦た自ずから危うし）」。「何能早」はどうしてこんなにも早いのか，と言う意である。張繼「馮翊西樓（馮翊の西樓）」（『全唐詩』卷242）「北風吹雁聲能苦，遠客辭家月再圓（北風雁を吹きて 聲能くも苦しく，遠客家を辭して 月再び円かなり）」。「能苦」はこんなにも苦しいである。

②甚だしい事を言う語。こんなにも，或いはかくのごとくの意で解釈も出来るが，しっくりこないように思われるものはこの意に属する。杜甫「贈裴南部（裴南部に贈る）」（『全唐詩』卷234）「独醒時所嫉，群小謗能深（独り醒むれば時の嫉む所となり，群小 謗ること能だ深し）」。「謗能深」は誹謗する事が何ともひどい，或いはことさらひどい，である。王維「達奚侍郎夫人寇氏挽詞二首」其の二（『全唐詩』卷126）「秋日光能淡，寒川波自翻（秋日 光能だ淡く，寒川 波自ずから翻る）」。「光能淡」は光が何とも淡い，或いは甚だ淡いである。これは悲哀を述べた詩であるから言葉遣いも重々しく，景色の中に情が込められている。韓愈「杏花」（『全唐詩』卷338）「居隣北郭古寺空，杏花兩株能白紅（居隣の北郭 古寺空しく，杏花兩株 能だ白紅）」。（杏の花が）紅白入り乱れて何とも賑やかな事よ，と言うのであり，古寺の荒涼を際立たせている。

③寧。寧可（なんぞ〜べき）の「寧」である。

④数量を見積もる語。大抵は幾何（いくばく）・多少（どれくらい）などの語と連用され，疑問のニュアンスとなる。杜甫「贈衛八処士（衛八処士に贈る）」（『全唐詩』卷216）「少壯能幾時，鬢髮各已蒼（少壯 能ぞ幾時ぞ，鬢髮 各おの已に蒼し）。李商隱「夢沢」（『全唐詩』卷539）「未知歌舞能多少，虛減宮廚為細腰（未だ知らず 歌舞能ぞ多少ぞ，虚しく宮厨を減らして細腰を為す）」。「能」は韓偓「秋霖夜憶家（秋霖の夜家を憶う）」（『全唐詩』卷680）「不知短髮能多少，一滴秋霖白一莖（知らず 短髮能ぞ多少ぞ，一滴の秋霖 一莖を白くす）。羅隱「鄴城」（『全唐詩』卷655）「英雄亦到分香处，能共常人較幾多（英雄亦た到る 香を分かつ处，能ぞ常人と較うこと幾多ぞ）」。

⑤只（ただ）・徒（いたずらに）である。杜甫「戲贈閬鄉秦少公短歌（戯れに閬郷の秦少公に贈る 短歌）」（『全唐詩』卷217）「昨夜邀歡樂更無，多才依旧能潦倒（昨夜歓びを邀えて楽しみ更に無きも，多才旧に依りて 能らに潦倒）。相変わらず落ちぶれているだけだ，と言うのである。また杜甫「公安送韋二少府匡贊（公安にて韋二少府匡贊を送る）」（『全唐詩』卷232）「念我能書數字至，將詩不必万人伝（我を念わば能だ數字を

書して至れ、詩を^{もつ}將て必ずしも万人には伝えざれ)。もし私の事を気にかけて下さるならば、ごく短い手紙を送ってくれば十分であり、わざわざ詩を作るには及ばない、と言うのである。また杜甫「義鵠行⁴⁹」(『全唐詩』卷217)「高空得^{もつ}蹢躅、短草辞^{もつ}蜿蜒。折尾能一掉、飽腸皆已穿(高空に蹢躅たるを得て、短草に蜿蜒たるを辞す。尾を折りて能だ一たび^{もつ}掉い、飽腸 皆已に穿たる)」。蛇が隼に撃ち殺され、その折れたしっぽがピクピクしていたが、それも一度きりであった、と言うのである。また杜甫「月」(『全唐詩』卷225)「只益丹心苦、能添白髮明。干戈知滿地、休照国西營(只だ丹心の苦しみを益し、能だ白髮の明らかなるを添う。干戈 地に満つるを知らば、照らすを休めよ 国西の營を)。「能」と「只」は互文である。また杜甫「萤火」(『全唐詩』卷225)「未足臨書卷、時能点客衣(未だ書卷に臨むに足らず、時に能だ客衣に点ず)」。衣の上に光を点じるだけだ、と言うのである。白居易「生離別」(『全唐詩』卷435)「食檠不易食梅難、檠能苦兮梅能酸。未如生別之為難、苦在心兮酸在肝(檠を食らうは梅を食らうの難きに易らず、檠は能だ苦く梅は能だ酸す。未だ如かず 生別の難きを為すに、苦は心に在りて酸は肝に在り)」。檠は苦いだけ、梅は酸っぱいだけであり、その味は口や舌で感じるにとどまり、生き別れとなる辛さが心臓や肝臓にわたかまるのには及ばない、と言うのである。

⑥得(当然だ)。李白「上李邕(李邕に上る)」(『全唐詩』卷168)「宣父猶能畏後生、丈夫未可輕年少(宣父すら猶お後生を畏るるを能たり、丈夫 未だ年少を軽んずべからず)」。孔子ですら後進の者を畏敬していた、と言う意である。王建「冬夜感懷」(『全唐詩』卷299)「斷得人間事、長如此亦能(斷じ得たり 人間の事、長に此の如きも亦能たり)」。いつもこの通りであってもそれは仕方がない、と言うのである。また「懶能」「慵能」の項も見よ。

⑦副詞。概ね古漢語の但(ただ)、或いは現代漢語の尽管(構わずに～する・～ではあるがしかし…だ)に相当する。杜甫「寄李十四員外布十二韻(李十四員外布に寄す十二韻)」(『全唐詩』卷227)「問能過小徑、自為摘嘉蔬(問うれば能だ小徑を過ぎり、自ら為に嘉蔬を摘め)」。気が滅入った時は遠慮せず小道を通して来て野菜を摘めばよい、と言う意である。韓愈「贈崔立之評事(崔立之評事に贈る)」(『全唐詩』卷339)「高士例須憐^{もつ}麴蘖⁵⁰、丈夫終莫生哇咿。能來取醉任喧呼、死後賢愚俱泯泯(高士は例ね須らく麴蘖を憐れむも、丈夫終に哇咿を生ずる莫し。能だ來たれ 酔いを取りて喧呼するに任せん、死後賢愚 俱に泯泯)。「能來」は「尽管來」で、同句中の「任(任從、～するに任せる)」と対応する。王維「答張五弟(張五弟に答う)」(『全唐詩』卷125)「不妨飲酒復垂釣、君但能來相往還(妨げず 酒を飲み復た釣を垂るるを、君但能だ來たれ 相往還せん)。「但能」は疊用語であり、「但能來」は「尽管來」である。岑參「瀧水東店送唐子歸嵩陽(瀧水の東店にて唐子の嵩陽に歸るを送る)」(『全唐詩』卷200)「歸夢秋能作、鄉書醉懶題(歸夢 秋に能だ作すも、鄉書 酔いて題するに懶し)」。この句の中の「能」は接統詞である。2句一組の句であり、秋の日にはしきりに歸郷の夢を見るものの、しかしいつも酒で憂さを晴らすばかりで故郷への手紙を書くのが面倒である、と言う意味である。

⑧「能」は「仍」に通じ、意味は還(また・更に)と概ね一致する。李白「日出東南隅行」⁵¹「陌頭能駐馬、花處復添香(陌頭 能た馬を駐め、花處 復た香を添う)」。杜甫「台上」(『全唐詩』卷227)「改席台能迴、留門月復光(席を改むれば台能た迴かにして、留門 月復た^{かがや}光く)」。また「茅堂檢校收稻二首(茅堂にて稻を収むるを檢校す 二首)」其の二(『全唐詩』卷229)「稻米炊能白、秋葵煮復新(稻米 炊げば能た白く、秋葵 煮れば復た新たり)」。以上の3例は全て「能」と「復」が対になっており、「能」はいずれも「還」の意味である。孟浩然「美人分香(美人香を分かつ)」(『全唐詩』卷160)「髻鬟垂欲解、眉黛拈能輕(髻鬟 垂れて解けんと欲し 眉黛拈えば能た輕し)」。李白「江夏行」(『全唐詩』卷167)「未知行李遊何方、作箇音書能斷絕(未だ知らず 行李何方にか遊べるを、箇の音書を作すも能た斷絶す)」。高適「別耿都尉(耿都尉に別る)」(『全唐詩』卷211)「四十能學劍、時人無此心(四十にして能た劍を學ぶも、時人 此の心無し)」。王維「愚公谷三首」其の二(『全唐詩』卷126)「雖則行無跡、還能響應聲(則ち行に跡無しと雖も、還能た響けば聲に應ず)」。以上の諸例の中の「能」は全て能够(出来る)の意味で解釈出来ず、意味は「還」と同じである。最後の一例の「還能」は疊用語であり、「還能」の意味は仍然(依然として、なお)と同じである。2句の意味は、愚公谷に人跡は無いものの、しかし鳥が鳴くと時折こだまが返って来る、と言うものである(「響」はこだまを指す)。

〔得能〕 dénéng 這樣（こんなにも）或いは如許（かくのごとく）である。皮日休「新秋言懷寄魯望三十韻（新秋言懷 魯望に寄す三十韻）」（『全唐詩』卷612）「松身渾箇矮，石面得能顛（松身 渾箇も矮く，石面 得能も顛めり）」。劉淇「助字弁略」に「得能即箇様，吳人語也（得能は即ち箇様，吳人の語なり）」とある。⁵²「能」の語義①を見よ。

〔懶能〕 lǎnnéng 懶得（気が進まない，～する気にならない）である。姚合「武功県中作三十首（武功県中の作三十首）」其の二十四（『全唐詩』卷498）「久貧還易老，多病懶能医（久しく貧にして還た老い易く，多病 医すに懶能し）」。陸龜蒙「自遣（自ら遣る）」（『全唐詩』卷628）「便使筆精如逸少，懶能書字換群鵝（便使筆精 逸少の如きも，字を書きて群鵝に換うるに懶能し）」。〔能〕の語義⑥を見よ。

〔能箇〕 nénggè 這樣（こんなにも）或いは如許（かくのごとく）である。皮日休「夏首病愈因招魯望（夏首病愈え，因りて魯望を招く）」（『全唐詩』卷613）「貧養山禽能箇瘦，病閑芳草就中肥（貧養の山禽 能箇も瘦せ，病閑の芳草 就中肥ゆ）」。〔能〕の語義①を見よ。（大山）

25. 前期 qiánqī

予期すること，または予約することである。過去を指す例としては，白居易「夢仙（仙を夢む）」（『全唐詩』424）「空山三十載，日望輜輶迎。前期過已久，鸞鶴無來聲（空山 三十載，日に輜輶の迎ふるを望む。前期過ぐることに已に久しく，鸞鶴來たる聲無し）」。未來を指す例としては，杜甫「晚發公安⁵³（晚に公安を發す）」（『全唐詩』233卷）「舟楫眇然自此去，江湖遠適無前期（舟楫眇然として此より去れば，江湖遠く適きて前期無し）」。司空曙「別盧秦卿⁵⁴（盧秦卿に別る）」（『全唐詩』卷292）「知有前期在，難分此夜中（前期の在ること有るを知れども，分れ難し此の夜の中）」。〔分れ難し〕とは，離別しがたい，ということ。郭良「早春寄朱放⁵⁵（早春 朱放に寄す）」「心知剡溪路，聊且寄前期（心に剡溪の路を知り，聊且前期に寄す）」。（関）

26. 強 qiáng

①情態副詞。故意に，わざわざ。盧肇「戲題（戯れに題す）」（『全唐詩』卷551）「神女初離碧玉階，彤雲猶擁牡丹鞋。知道相公憐玉腕，強將纖手整金釵（神女初めて離る碧玉の階，彤雲猶お擁す牡丹の鞋。知道く相公 玉腕を憐れみ，強に纖手を將って金釵を整うと）」。〔強に～將って〕は，〔故に～將って〕である。司空曙「秋園」（『全唐詩』卷293）「傷秋不是惜年華，別憶春風碧玉家。強向衰叢見芳意，茱萸紅實似繁華（秋を傷むは是れ年華を惜しむにあらず，別れに憶う 春風 碧玉の家。強らに衰叢に向いて芳意見れ，茱萸の紅実は繁華に似たり）」。〔見る〕は〔現る〕に同じ，〔強らに向いて〕は，〔故に向いて〕〔特に向いて〕ということ。『全唐詩』卷二七「雜曲歌辭・楊下采桑」（『全唐詩』卷27）「飛絲惹綠塵，軟葉對孤輪。今朝入園去，物色疆看人（飛絲は緑塵を惹き，軟葉は孤輪に対す。今朝園に入り去き，物色 疆らに人を看る）」。〔疆〕字は即ち〔強〕字である。

②程度副詞。〔甚だ〕〔最も〕〔多く〕〔深く〕等の意味である。王績「建德破後入長安 詠秋蓬示辛學士（建德破れて後長安に入り秋蓬を詠じて辛學士に示す）」（『全唐詩』卷37）「孤根何處斷，輕葉強能飛（孤根何れの処にか斷つ，輕葉 強だ能く飛ぶ）」。意味は，甚だ能く飛ぶ，ということ。王勃「采蓮曲」（『全唐詩』卷55）「葉翠本羞眉，花紅強如頰（葉の翠きは本より眉に羞じ，花の紅きは強だ頰の如し）」。〔強だ～如し〕の意味は〔甚だ～である〕。王維「酬郭給事（郭給事に酬ゆ）」（『全唐詩』卷128）「強欲從君無那老，將因臥病解朝衣（強だ君に従わんと欲するも老を那んともする無く，將に臥病に因りて朝衣を解かんとす）」。岑參「行軍九日思長安故園（行軍にて九日 長安の故園を思う）」（『全唐詩』卷201）「強欲登高去，無人送酒來（強だ高きに登り去かんと欲するも，人の酒を送り來たる無し）」。〔強だ欲す〕は〔甚だ欲す〕というような意味である。李商隱「無題」（『全唐詩』卷539）「露花終裊濕，風蝶強嬌饒（露花終に裊濕たり，風蝶 強だ 嬌 饒たり）」。意味は上の例に同じ。『遊仙窟』「双燕子，聯翩幾萬回⁵⁶，強知人是客，方便惱他來（双燕子，聯翩として幾萬回りぞ，強だ人は客なるを知りて，方便に他を悩まし來る）」。〔関〕

27. 諒 qiào

「渾^なお」「直^なお」である。「諒」字は「悄」や「俏」にも作る。また時に「峭」に作るものもある。この種の用法は詩中に多くは見られず、なお且つまた「悄」字を用いることが多い。詞曲の中では「諒」「悄」「俏」の字を随意に用いる。

[悄] qiǎo 「諒」に同じ。劉禹錫「送李策秀才還湖南因寄幕中親故兼簡衡州呂八郎中（李策秀才の湖南に還るを送る 因りて幕中の親故に寄せ 兼ねて衡州の呂八郎中に簡す）」（『全唐詩』卷354）「悄如促柱弦，掩抑多不平（悄^なお促柱の弦⁵⁷の如く，掩抑するに不平多し）」。

皮日休「魯望読襄陽耆旧伝見贈五百言過褒庸材靡有称是然襄陽曩事歴歴在目夫耆舊傳所未載者漢陽王則宗社元勳孟浩然則文章大匠予次而贊之因而寄答亦詩人無言不酬之義也次韻（魯望「襄陽耆旧伝」を読みて五百言を贈らる 庸材を過褒するも 是に^{かな}称うこと有る靡^なし 然れども襄陽の曩事歴歴として目に在り 夫れ「耆旧伝」に未だ載せざる所の者 漢陽王則ち宗社の元勳 孟浩然則ち文章の大匠 予次ぎて之を賛し 因りて寄答す 亦た詩人言無くんば酬^{こた}えざるの義なり 次韻す）」（『全唐詩』卷609）「興替忽矣新，山川悄然旧（興替 忽として新なり，山川 悄然として旧なり）」。「悄然」は「悄」に同じく，依然としてという意味である。（関）

28. 且 qiě

①「粗略（ほぼ，大まかに）」ということを表す語。杜甫「逢唐興劉主簿弟（唐興に劉主簿弟に逢う）」（『全唐詩』卷226）「江山且相見，戎馬未安居（江山 且^はほ相い見るも，戎馬 未だ居を安んぜず）」。

旅の途中あわただしく会う，ぞんざいに会うという意味。また杜甫「豎子至（豎子 至る）」（『全唐詩』卷229）「植梨且綴碧，梅杏半伝黄（植梨 且^は碧を綴り，梅杏 半ば黄を伝う）」。

ほぼ青く実っているということ，「半ば」と対になっている。「且」を「才（わずかに）」に作るものもあり，「才」もまたほぼ，大まかに，という意味。

②「藉^{たと}い」「就^{たと}い」である。杜甫「寄岑嘉州（岑嘉州に寄す）」（『全唐詩』卷229）「外江三峡且相接，斗酒新詩終自⁵⁸疏（外江 三峡 且^{たと}い相接すとも，斗酒 新詩 終に自^{おのづか}ら疏なり）」。

「且^{たと}い相接すとも」は「藉^{たと}い相接すとも」である。たとい江路とつながっていても，詩や酒で会うご縁はとうとう疎らになったということ。「且」字は「終」字と対になっている。

③「正に（ちょうど）」「倒^{かえ}って（逆に）」である。「却」字には「正に」また「倒^{かえ}って」の意味がある，だから「且」字も時に「却」字として解釈できることがある。基母潜「春泛若耶溪（春 若耶溪に泛ぶ）」（『全唐詩』卷135）「生事且弥^{まさ}漫，願為持竿叟（生事且^{まさ}に弥^{みだ}いよ漫る，願わくは持竿の叟と為らんことを）」。

世間の事は正に入り乱れているということ。白居易「元微之除浙東觀察使喜得杭越隣州先贈長句（元微之 浙東觀察使に除せられ 杭越州を隣するを得たるを喜び 先に長句を贈る）」（『全唐詩』卷446）「官職比君雖校小，封疆与我且為隣（官職君に比すれば校^{やや}小なりと雖も，封疆我と且^{かえ}って隣と為る）」。

杭が越と正に隣りあう州となった。また，倒^{かえ}って隣りあう州となった，却って隣りあう州となった，ということを行い，「雖」字と呼応する。

④「尚^なお（今でも）」である。杜甫「詠懷古跡（古跡を詠懷す）」（『全唐詩』卷230）「羯胡事主終無賴，詞客哀時且未還（羯胡 主に事うるも終に無賴，詞客 時を哀しみて且^なお未だ還らず）」。

「且^なお未だ還らず」は，「尚^なお未だ還らず」である。また杜甫「閩山歌（閩山の歌）」（『全唐詩』卷220）「中原格鬪且未歸，應結茅齋看青壁（中原格鬪すれば且^なお未だ歸らず，應に茅齋を結びて青壁を見るべし）」。

「且^なお未だ歸らず」は，「尚^なお未だ歸らず」である。また杜甫「得家書（家書を得たり）」（『全唐詩』225卷）「今日知消息，他鄉且旧居（今日 消息を知る，他郷なるも且^なお旧居なり）」。

「且^なお旧居なり」は，今でも旧居にいる，である。また杜甫「江頭四詠^{けいせき}鵲^{せき}」（『全唐詩』卷227）「且無鷹隼慮，留滯莫辞勞（且^なお鷹隼の慮^{おもんばか}り無ければ，留滯の勞を辞する莫かれ）」。

幸いなことに今でも鷹や隼に襲われる心配がないので，この地に滞在するのに差支えがない，というのである。また杜甫「復愁十二首（復た愁う十二首）」（其十）（『全唐詩』卷230）「巫山猶錦樹，南国且黃鸝（巫山 猶^なお錦樹あり，南国 且^なお黃鸝あり）」。

「且」は「猶」と互文であり，今でもという意味である。白居易「和元九与呂二同宿話旧感贈（元九 呂二と同宿し旧を話し感じて贈るに和す）」（『全唐詩』卷437）「聞道秋娘猶且在，至今時復問微之（聞道く秋娘猶^なお在りて，今に至るまで時に復た微之を問うと）」。

「且^なお在

り」は、「尚お在り」である。

⑤「只」「但」である。杜甫「送高三十五書記（高三十五書記を送る）」（『全唐詩』卷216）「崆峒小麦熟，且願休王師。請公問主將，安^も用窮荒為（崆峒 小麦熟す，且願う王師を休めんことを。請う公 主將に問え，安くんぞ荒を窮むるを用いんやと）」。「且願う」は、「只願う」である。また杜甫「後出塞五首」（其三）（『全唐詩』卷218）「六合已一家，四夷且孤軍（六合は已に一家たり，四夷は且孤軍のみ）」。「且孤軍のみ」は、「只孤軍のみ」である。ただ孤軍があるだけに過ぎない，ということ。白居易「舟行阻風寄李十一舍人（舟行 風に阻まる 李十一舍人に寄す）」（『全唐詩』卷438）「且愁江郡何時到，敢望京都幾歲還（且愁う江郡何れの時にか到らん，敢えて京都を望み 幾歳にか還らん）」。「且愁う」は「只愁う」である。盧仝「蕭宅二三子贈答詩二十首 客答蛺蝶（蕭宅の二三子と贈答する詩二十首 客蛺蝶に答う）」（其十八）（『全唐詩』卷387）「且須看雀兒，雀兒銜爾將（且須らく雀兒を見るべし，雀兒爾を銜みて將く）」。「且須らく～べし」は、「只須らく～べし」である。李商隱「天水閑話旧事^も（天水に旧事を閑話す）」（『全唐詩』卷540）「王昌且在牆東住，未必金堂得免嫌（王昌は且牆の東に住みて在るも，未だ必ずしも金堂の嫌うを免るを得ず）」。「且在る」は「只在る」である。韓偓「昼寢」（『全唐詩』卷683）「何必苦勞雲雨夢，王昌只在此牆東（何ぞ必ずしも雲雨の夢に苦勞せん，王昌は只此の牆の東に在り）」。「只」に作る字が左証となろう。李商隱「同崔八詣藥山訪融禪師（崔八と^も同に藥山に詣で融禪師を訪ぬ）」（『全唐詩』卷539）「岩花澗草西林路，未見高僧只見猿（岩花 澗草 西林の路，未だ高僧に見えずして只猿を見る）」。「只猿を見る」は「且猿を見る」である。『唐音統籤』⁶²「只」を「且」に作る，「且」は即ち「只」である。

⑥「本より」「自ら」である。杜甫「棕拂子」（『全唐詩』卷220）「棕拂且薄陋，豈知身効能。不堪代白羽，有足除蒼蠅（棕拂且より薄陋なるも，豈に知らんや身は効能あるを。白羽に代うるに堪えざるも，蒼蠅を除くに足る有り）」。「且より薄陋」は「本より薄陋」ということ。凡庸で粗末なものであることをいう。盧仝「蜻蜒歌」（『全唐詩』卷389）「篙工楫師力且武，進寸退尺莫能度（篙工^も楫師^も力且より武けれども，進寸退尺 能く度る莫し）」。「力且より武し」は，力はもとより大きい，ということ。鸞鸞「告絶」（『全唐詩』卷800）「棄置今何道，當時且自親（棄置せられ今何ぞ道はん，當時且より自ら親しきと）」。「もともとは自然に親しみあっていた，ということ。皮日休「傷盧獻秀才（盧獻秀才を傷む）」（『全唐詩』613卷）「只為白衣聲過重，且非青漢路難通（只だ白衣たるも聲は過重にして，且より青漢の路の通じ難きに非ず）」。「且より～非ず」は，「本より～非ず」ということ。「青漢の路」は青雲の路の意で，この句は富貴な者が声望ある者によって排斥されることをいうのである。寒山「詩三百三首」（其二八四）（『全唐詩』卷806）「独坐無人知，孤月照寒泉。泉中且無月，月自在青天（独坐して人の知る無く，孤月は寒泉を照らす。泉中且より月無く，月は自ら青天に在り）」。「泉中には本より月が無い，ということである。以上「本より」の意味。李商隱「南山趙行軍新詩盛称遊宴之治因寄一絶（南山の趙行軍の新詩 遊宴の治ぐを盛称し 因りて一絶を寄す）」（『全唐詩』卷806）「梁王司馬非孫武，且免宮中斬美人（梁王の司馬は孫武に非ざれば，且^も宮中に美人を斬るを免る）」。「且ら免る」は「自ら免る」である。以上「自ら」の意味。また「要且」を見よ。

⑦程度副詞，「很（とても）」「甚だ」「十分に」「非常に」等の意を表す。

㊟「且」の字は多くの意味を持つ，『詩經』大雅「韓奕」に「籩豆有且，侯氏燕胥（籩豆^も且たる有り，侯氏 燕す）」，鄭玄箋に「且，多貌（且は，多き貌なり）」とあり，この用法は形容詞であろう。範圍副詞として用いるときは範圍の全てを表し「俱に」「都て」の意味，程度副詞として用いるときには「很（とても）」「甚だ」の意味を表す。

【要且】yàoqiě 熟語。「要自ら（自ずとそうなるはずだ，もとよりそうであるはずだ）」の意。白居易「夜題玉泉（夜玉泉に題す）」（『全唐詩』卷462）「遇客多言愛山水，逢僧尽道厭羈塵。玉泉潭畔松間宿，要且經年無一人（客に遇えば多く言う山水を愛すと，僧に逢えば尽く道う羈塵を厭うと。玉泉潭畔 松間の宿，要且^もら 年を経て一人無し）。人びとは山水を愛すと言い，静寂を愛すという，しからば玉泉に夜宿る者は，おのずと一人もいなくなるはずだ。方干「送弟子伍秀才赴举（弟子伍秀才の挙に赴くを送る）」（『全唐詩』卷650）「由来不要文章得，要且文章出衆人（由来 文章を要せず，要且^もら文章衆人に出ず）」。「得」は語末の助字。世の人は特に文章を必要としておらず，君の文章は，自然と衆より抜きんでるだろう，ということ。また方干「項洙処

士画水墨釣台（項洙処士 水墨の釣台を画く）」（『全唐詩』巻651）「雖云智慧⁶⁶生靈府，要且功夫在筆端（智慧は靈府に生ずと云うと雖も，要^{おのずか}且ら功夫は筆の端に在り）」羅鄴「早梅」（『全唐詩』巻654）「満園桃李雖堪賞，要且東風晚始生（満園の桃李賞すに堪うと雖も，要^{おのずか}且ら東風^{くれ}晩に始めて生ず）」。（関）

29. 且可 qiěkě

「且」である。「可」は接尾語であり、「乍可（ただ～だけ）」「寧可（むしろ～としても）」「省可（～する必要はない）」の「可」と同じ用法である。韓愈「感春四首（春に感ず四首）」（其四）（『全唐詩』巻338）「百年未満不得死，且可勤買抛青春（百年未だに満たずして死するを得ず，且^{しばら}可く勤めて抛青春を買え）」。「抛青春」は酒の名である。また韓愈「琴操十首 別鵠操⁶⁷」（其九）（『全唐詩』巻336）「更無相逢日，且可繞樹相隨飛（更に相逢う日無からん，且^{しばら}可く樹を繞りて相隨いて飛ばん）」。「且」⑥を見よ。（関）

30. 竭来 qièlái

①「盍来」（何来／何不来）ということである。『升庵詩話』⁶⁸に「按ずるに『呂氏春秋』⁶⁹に，胶鬲武王に鮪水に見えて，曰く「西伯竭^{いづ}れ^{いづ}のときか去かん？我を欺く無かれ」と。武王曰く「子を欺かず，將に殷を伐たんとするなり」と。胶鬲曰く「竭^{いづ}れ^{いづ}のときか至らん？」と。武王曰く「將に甲子の日を以て至らんとす」と。注に「竭は何なり。」若し然らば，則ち「竭」の言を為すや「盍」なり。——則ち今文の襲いて用うる所の竭来は，亦た盍来と為すなり」。「盍」字には二つの意味がある。第一に「何ぞ」の意味，第二に「何ぞ～ざる」の意味。王引之『経伝釈詞』⁷⁰を参照。本項目は王氏の言うところの二つの意味に依り，分けて解説してゆく。『呂氏春秋』による「竭去」「竭至」の意味，つまり楊升庵のいう「盍来」は，「何」の意味に当たり，「竭来」は「何れのときか来たる」という意味となる。顔延年「秋胡」⁷¹（其七）「高節難久淹，竭来空復辞（高節には久しく淹まり難し，竭^{とど}ぞ来たりて空しく復た辞せん）」。「秋胡」の貞節の高さは，久しく留まることができない，秋胡はどうして空しく言葉で婦人を誘うというのか，ということ。李白「感興（興に感ず）」（『全唐詩』巻161）「竭来荆山客，誰為珉玉分。良宝絶見棄，虚持三見⁷²君（竭^{なん}ぞ来たる荆山の客，誰か為さん珉玉の分。良宝 絶えて棄てられ，虚しく持して三たび君に見ゆ）」。「何ぞ来たる（どうして来たのか）」の意味に従って解釈できる。玉石を見分けることができない世にあって，璞を献上しようという荆山の客はなぜやって来たのか，というのである。一方「竭来」は「何ぞ来たらざる」の意味で解釈できるものもある，高適「和崔二少府登楚丘城作（崔二少府の楚丘城に登りて作るに和す）」（『全唐詩』巻211）「公侯皆我輩，動用在謀略。聖心思賢才，竭来刈葵藿（公侯は皆我が輩，動用は謀略に在り。聖心は賢才を思うに，竭^{なん}ぞ来たりて葵藿を刈らざらん）」。「どうして葵藿が太陽に傾くような忠誠心のある者を採用するために来ないことがあろうか，という意味。「葵藿」は高適自身の状況を表す言葉，意味は『三国志』「曹植伝」⁷³に見える。李白「酬王補闕惠莊廟宋丞泚贈別（王補闕惠莊 莊廟宋丞泚の贈別に酬ゆ）」（『全唐詩』巻161）「勿踏荒溪坡，竭来浩然津。薛帶何辞楚，桃源堪避秦（踏む勿かれ荒溪の坡，竭^{なん}ぞ来たらざらん浩然の津。薛帶は何ぞ楚を辞せる，桃源は秦を避くるに堪えたり）」。「ここでは「竭」字が「勿」字と呼応しており，どうして浩然の津に来ないことがあろうか，ということである。浩然の津は「寛閑の野，寂寞の浜（広々として静かな野原や，ひっそりとわびしい岸辺）」⁷⁴であり，下二句はその注釈である。李商隱「井泥四十韻」（『全唐詩』巻541）「我欲秉釣者，竭来与我偕（我は秉釣⁷⁵の者たらんと欲するに，竭^{なん}ぞ来たりて我と偕にせざらん）」。「この句は先述の高適詩と本質的に同じである。以上が「何ぞ来たらざる」の意であり，「盍来」のもう一つの意味でもある。

②「去」である。「竭」を語義とし，「来」を接尾語として「竭来」とする。李白「送王屋山人魏万還王屋（王屋山人魏万の王屋に還るを送る）」（『全唐詩』巻175）「西涉清洛源，頗惊人世喧。采秀卧王屋，因窺洞天門。竭来遊嵩峰，羽客何双双。朝携月光子，暮宿玉女窓（西のかた清洛の源を涉り，頗る人世の喧^{おどろ}なるに驚く。采秀 王屋に臥し，因りて洞天の門^ゆを窺う。竭来きて嵩峰に遊び，羽客何ぞ双双たる。朝に月光子⁷⁶を携え，暮に玉女窓に宿る）」。「嵩峰に遊びに去く」ということ。詩の序⁷⁸によれば，この時李白と魏万は広陵で会い，詩を贈ってそれぞれが遊覧した場所を叙述しあったという。また李白「題嵩山逸人元丹丘山居（嵩山逸人 元丹丘の山居に題す）」（『全唐詩』巻184）「家本紫雲山，道風未淪落。况⁷⁹懷丹丘志，沖賞歸寂寞。竭来遊閩荒，

捫涉窮禹鑿。賁緣泛潮海, 偃蹇涉廬霍 (家は本 紫雲山, 道風未だ淪落せず。況んや丹丘の志を懷き, 沖賞 寂寞に帰するをや。竭来きて閩荒に遊び, 捫涉 禹鑿を窮む。賁緣⁸⁰潮海に泛かび, 偃蹇として廬霍に陟る)。閩に遊びに去き, 海に泛かび廬霍に陟^{のぼ}るといふこと。韋応物「大梁亭会李四栖梧作 (大梁亭に李四栖梧に会いて作る)」(『全唐詩』卷186)「富貴良可取, 竭来西入秦。秋風旦夕起, 安得客梁陳 (富貴良^{まこと}に取るべし, 竭来きて西のかた秦に入る。秋風 旦夕起き, 安んぞ梁陳に客たるを得ん)」。去きて西のかた秦に入るといふことである。李群玉「将遊羅浮登広陵楞迦台別羽客 (将に羅浮に遊ばんとして広陵楞迦台に登り羽客に別る)」(『全唐詩』卷568)「竭来羅浮巔, 披雲煉瓊液 (羅浮巔に竭来き, 雲を披き瓊液を煉らん)。題に言う「将に羅浮に遊ばんとす」は計画するといふことであり, 羅浮に去くことをいう。李涉「春山三竭来 (春山に三たび竭来く)」、(『全唐詩』卷477) 其一に言う「釣魚竭来春日暖, 沿溪不厭舟行緩 (釣魚 竭来きて春日暖かなり, 溪に沿いて舟行の緩やかなるを厭わず)」。其二に言う「山上竭来採新茗, 新花乱発前山頂 (山上 竭来きて新茗を採る, 新花乱りに発き山頂に前む)」。其三に言う「採葉竭来葉苗盛, 葉生只傍行人徑 (採葉 竭来きて葉苗盛なり, 葉生じて只だ傍う行人の徑)」。これらは魚を釣りに去く, 山上に去く, 葉を採りに去くといふこと。鮑溶「采蓮曲二首」(『全唐詩』卷486) 其一に言う「弄舟竭来南塘水, 荷葉映身摘蓮子 (舟を弄びて南塘水に竭来き, 荷葉 身を映して蓮子を摘る)」。其二に言う「採蓮竭来水無風, 蓮潭如鑒松如龍 (蓮を採るに 竭来きて水は風無く, 蓮潭は鑒の如く松は龍の如し)」。舟を操って去き, 蓮を採りに去くことをいう。

③「来」である。「竭」を發語辭とし(『韻会』⁸¹に見える), 「来」を語義とし, ほぼ「来(来たり)」に同じ。張九齡「歲初巡属県登高安南樓言懷 (歲初 属県を巡り高安南樓に登り言懷す)」(『全唐詩』卷47)「竭来彭蠡沢, 載經敷淺原 (竭^こ来たり 彭蠡沢, 載^{すなわ}ち經たり 敷淺原)」。彭蠡沢に來たといふこと。顔真卿「刻清遠道士詩因而繼作 (清遠道士の詩を刻す 因りて繼ぎて作る)」(『全唐詩』卷152)「不到東西寺, 于今五十春。竭来従旧賞, 林壑宛相親 (東西寺に到らず, 今に于いて五十春。竭^こ来たりて旧賞に従い, 林壑 宛も相親しむ)」。昔遊覧した土地に再び來たことをいう。徐浩「謁禹廟 (禹廟に謁す)」(『全唐詩』卷215)「負責故郷近, 竭来申鉏差⁸² (負責 故郷近く, 竭^こ来たりて鉏差を申ぶ)」。來て供物をささげるといふ。

④「爾来 (それ以来)」または, その時以来, といふこと。今まで, といふこと。「来」字の別の(動詞ではない)意味。「竭」は發語辭である。時間と関係する叙述に用いられるときは, この意味で解釈できよう。柳宗元「韋道安」(『全唐詩』卷352)「竭来事儒術, 十載所能逞 (竭来 儒術を事とし, 十載能く逞^{ほしいまま}にする所)」。今まで儒教を学んで十年が経つことをいう, また儒教を学んで十年來といふこと。

⑤語助辭。張協「雜詩」⁸³其六「感物多思情, 在陰易常心。竭来戒不虞, 挺轡越飛岑 (物に感じて思情多く, 陰に在りて常心たり易し。竭来 虞らざるを戒め, 轡を挺して飛岑を越ゆ)」。陳子昂「感遇詩三十八首」其三十一(『全唐詩』卷83)「竭来豪遊子, 勢利禍之門 (竭来 豪遊の子, 勢利 禍の門)」。張九齡「奉和吏部崔尚書雨後大明朝堂望南山 (吏部崔尚書の雨後大明朝堂に南山を望むに奉和す)」(『全唐詩』卷49)「竭来青綺外, 高在翠微先 (竭来 青綺の外, 高さこと翠微の先に在り)」。李益「自朔方還与鄭式瞻崔称 鄭子周 岑賛同会法雲寺三門避暑 (朔方より還り鄭式瞻 崔称 鄭子周 岑賛と共に法雲寺三門に会し避暑す)」(『全唐詩』卷282)「予本疏放士, 竭来非外矯。誤落辺塵中, 愛山見山少 (予 本より疏放の士, 竭来 外矯するに非ず。誤りて辺塵の中に落ち, 山を愛するも山を見ること少なし)」。 (関)

31. 竭 qiè

①『韻会』に「竭は去なり」とある。皮日休「初夏遊楞迦精舍 (初夏に楞迦の精舍に遊ぶ)」(『全唐詩』卷609)「竭去山南嶺, 其險如邛笮⁸⁴ (竭き去けり山南の嶺, 其の險なること邛笮の如し)。「竭き去けり」は, 重言である。【竭来】の②を見よ。

②語助辭。意味をなさない。【竭来】の⑤を見よ。(関)

32. 者 zhě

①これ, この。蜀王衍「醉妝詞」(『全唐詩』卷8)「者边走, 那邊走, 只是尋花柳。那邊走, 者边走, 莫厭金杯酒 (者^{こなた}辺に走き, 那^{あなた}邊に走き, 只 是れ花柳を尋ぬ。那邊に走き, 者^{こなた}邊に走き, 金杯の酒を厭う莫れ)」。 (関)

②語気助詞,「着(～している)」の意であり,また「焉」の意である。王維「送秘書晁監還日本国序(秘書晁監の日本国に還るを送る序)」(『全唐詩』卷127)「子其行乎,余贈言者(子 其れ行かんか,余 言を贈る)」。

これは,「余贈言焉(私は言葉を送る)」という意である。唐玄宗「經鄒魯⁸⁵祭孔子而歎之(鄒魯を経て孔子を祭りて之を歎く)」(『全唐詩』卷30)「夫子何為者,栖栖⁸⁶一代中(夫子 何をか^な為者さん,栖栖たり 一代の中)」。

これは「何をか為さん」あるいは「何を為さんや」という意である。(長谷川)

33. 珍重 zhēnzhòng

「多謝(大いに感謝する)」,「難得(めったにない)」,幸いに。また仔細に(注意深く),あるいは「保重(大切に,お大事に)」。

劉禹錫「劉駙馬水亭避暑(劉駙馬の水亭に避暑す)」(『全唐詩』卷359)「尽日逍遙避煩暑,再三珍重主人翁(尽日逍遙して煩暑を避け,再三 珍重す 主人の翁)」。

これは「多謝」の意。曹唐「小遊仙詩九十八首」其十九(『全唐詩』卷641)「穿花渡水來相訪,珍重多才阮步兵(花を穿ち水を渡り来りて相訪う,珍重す 多才の阮步兵)」。

これは「多謝」,あるいは「難得」の意。吳融「得京中親友書久無音耗以詩代謝(京中の親友の書を得,久しく音耗無きを訝しみ,詩を以て謝するに代う)」(『全唐詩』卷687)「珍重故人知我者,九霄休復寄音徽(珍重す 故人の我を知る者,九霄 復た音徽を寄するを休めよ)」。

これは「多謝」の意。羅隱「寄酬鄴王羅令公(鄴王羅令公に寄せ酬ゆ)五首」其三(『全唐詩』卷661)「珍重珠璣兼繡段,草玄⁸⁷堂下寄揚雄(珍重す 珠璣 繡段を兼ねるを,玄を堂下に草して揚雄に寄す)」。

これは「多謝」あるいは「難得」の意。徐鉉「謫居舒州累得韓高二舍人書作此寄之(舒州に謫居して累ねて韓高二舍人の書を得,此れを作りて之に寄す)」(『全唐詩』卷754)「珍重韓君与高子,殷勤書札寄相思(珍重す韓君と高子と,殷勤に札を書して相思を寄す)」。

李紳「壽陽罷郡日有詩十首与追懷不殊今編於後兼紀瑞物(壽陽に郡を罷む日,詩十首有り,追懷と殊ならず,今 後に編し,兼ねて瑞物を紀す)」其二⁸⁸「肥河維舟阻凍祇待救命(肥河に舟を維ぎ,凍るに阻まれ,祇だ救命を待つ)」⁸⁹(『全唐詩』卷480)「珍重八公山下叟,不勞重淚更追攀(珍重す 八公山下⁹⁰の叟,重淚して更に追攀するを勞せず)」。

これは思うに郡を去る日に郡の人々が轅にしがみついて見送り,郡民に別れの言葉を寄せたのである。(長谷川)

34. 真成 zhēnchéng

「真是,真箇(本当に,たしかに)」,あるいは副詞「真」に動詞「成」を加えた熟語とし,あるいは単純な語気副詞とする。『助字弁略』卷一「真」字の条に「真成」という語が付帯しており,「真箇(たしかに),真如此(まったくこのようだ)」と解し,併せて方言であると説明する。王昌齡「長信秋詞五首」其四(『全唐詩』卷143)「真成薄命久尋思,夢見君王覺後疑(真成に薄命にして久しく尋思し,夢に君王を見て覺むる後に疑う)」。

杜甫「上牛頭寺(牛頭寺に上る)」(『全唐詩』卷227)「青山意不尽,袞袞上牛頭。無復能拘礙,真成浪出遊(青山 意尽さず,袞袞として牛頭に上る。復た能く拘礙する無く,真成に浪に出遊す)」。

李白「述德兼陳情上哥舒大夫(德を述べ兼ねて情を陳べ,哥舒大夫に上る)」(『全唐詩』卷168)「衛青謾作大將軍,白起真成一豎子(衛青は謾りに大將軍と作り,白起は真成に一豎子なり)」。

以上三例はすべて「真是(本当に)」という意。張文成『遊仙窟』「真成物外希奇物,實是人間斷絶人(真成に物外の希奇たる物,實に是れ人間の斷絶せる人)」。

以下の「真成」は意味がやや軽く,「真箇」と解釈した方がよい。韓愈「過鴻溝(鴻溝に過る)」(『全唐詩』卷344)「誰勸君王回馬首,真成一擲賭乾坤(誰か勸めん 君王の馬首を回すを,真成に一擲して乾坤を賭せん)」。(長谷川)

35. 鎮 zhèn

①常に,長くの意。唐太宗「詠燭二首」其一(『全唐詩』卷1)「鎮下千行淚,非是為思人(鎮に下る 千行の淚,是れ人を思うが為に非ず)」常に涙が流れると言うのである。韓愈「題炭谷湫⁹¹祠堂(炭谷湫の祠堂に題す)」(『全唐詩』卷340)「林叢鎮冥冥,窮年無由刪(林叢 鎮に冥冥として,窮年 刪するに由無し)」。

常に

冥冥と薄暗いことを言う。李商隱「無題」(『全唐詩』卷541)「益德⁹²冤魂終報主, 阿童⁹³高義鎮橫秋(益德の冤魂 終に主に報い, 阿童の高義 鎮えに秋に横たわる)」。永遠に秋の中に横たわっていると言う。李商隱「独居有懷」(『全唐詩』卷540)「蠟花長遞淚, 箏柱鎮移心(蠟花 長く涙を通し, 箏柱 鎮に心に移す)。「鎮移」は, 常に移ろうことを言う。これは上句「長」字と意味が近く, 対になっている。

元稹「和樂天秋題曲江」(『全唐詩』卷401)「十載定交契, 七年鎮相隨(十載 定めて契りを交わし, 七年 鎮に相隨う)」。常に相隨うと言うのである。

②尽(ことごとく)の意である。王績「晚年叙志示翟处士(晚年 志を叙して翟处士に示す)」(『全唐詩』卷37)「三晨寧拳火⁹⁴, 五月鎮披裘⁹⁵(三晨 寧ぞ火を挙げん, 五月 鎮く裘を披る)」。ことごとく皮衣を着ていると言うのである。李商隱「燕台四首」其二(『全唐詩』卷541)「直叫銀漢墮懷中, 未遣星妃鎮來去(直だ銀漢をして懷中に墮とさしめ, 未だ星妃をして鎮く來去せしめず)」。

〔鎮長〕zhèncháng 「經常(いつも)」, 常に。「鎮」「長」の字義は等しく, つなげて用い重言としている。韓愈「杏花」(『全唐詩』卷338)「浮花浪蕊鎮長有, 纔開還落瘴霧中(浮花 浪蕊 鎮長に有り, 纔かに開き還た落つ 瘴霧の中)」。李群玉「龍安寺佳人阿最歌八首」其八(『全唐詩』卷570)「好魚輪懶盡, 白鷺鎮長飢(好魚は懶に輪し尽くし, 白鷺は鎮長に飢う)」。 (長谷川)

おわりに

以上, 35の用例を訳出した。「見」, 「能」, 「且」等の語が多く語義を持つことには驚かされる。どの語義に当てはめて詩を解釈するかによって, 当然ながら詩全体の意味が全く異なってくるので, 注意深く検討する必要がある。他に「復」「難為」等, 虚詞化して添えるだけとなった語の用例も見られ, 訓読に注意が必要である。全体を通して窺われるのは, 李白, 杜甫, 白居易の用例が多いことと, 対句と互文の用法に異読が多いことである。この点は, これまでの紀要にて指摘している。今後も継続して唐詩の用例を中心に訳出と検討とを進め, 唐詩における異読語彙の全体像を把握することを目標としている。それにあわせて, 個々の詩人における特殊な用法や, 時代や地方に共通する傾向, 語義の変遷などをも検討するつもりである。しかし用例が膨大なため, 誤読の可能性もある。ご示教を仰ぐ次第である。

注

- 1 王重民他『敦煌變文集』(人民文学出版社, 1957年)は「父母恩重經講經文」に作る。
- 2 親孝功で名が知られた曾參の母親。
- 3 注1『敦煌變文集』は「由閑」に作り, 「遊閑」の誤記と見なしている。
- 4 注1『敦煌變文集』は「真噴」に作るが, 黄征・張涌泉『敦煌變文校注』(中華書局, 1997年)は「噴噴」に作り, 『敦煌變文集』の誤記と見なす。「噴」は眼を見開いていからすこと, 「噴」は「瞪」(みつめる)の意味。
- 5 魏・嵇康に「風入松」という琴曲がある(『琴集』)。
- 6 『玉台新詠箋注』(中華書局, 1985年)。
- 7 蕭子範の誤り。
- 8 にっこりと笑うこと。
- 9 剛直でおろかなこと。
- 10 自分の文章のことを謙遜するという。
- 11 後漢の蔡邕のこと。
- 12 班婕妤「怨歌行」(『文選』卷27)「常恐秋節至, 涼風奪炎熱。棄捐筐筥中, 恩情中道絶」を踏まえる。
- 13 『全唐詩』に「健仔」に作る。
- 14 『全唐詩』に「勝」に作る。
- 15 周紹良他編『敦煌變文集補編』(北京大学出版社, 1989年)。
- 16 『全唐詩』に「牆牆」に作る。

- 17 張衡「西京賦」(『文選』卷2)に「寔惟地之奥区神皋(寔に惟れ地の奥区神皋なり)」とある。
- 18 嚴可均校輯『全上古三代秦漢三國六朝文』(中華書局, 1958年)。
- 19 『全唐詩』に「歇」に作る。
- 20 梁・顧野王『玉篇』(中文出版社, 1982年)。
- 21 56の誤り。
- 22 清・陳熙晋箋注『駱臨海集箋注』(中華書局, 1961年)。
- 23 陸游『避暑漫抄』(叢書集成初編, 中華書局, 1985年)。
- 24 王重民他輯録『全唐詩外編』(中華書局, 1982年)。
- 25 『全唐詩』に「青溪」に作る。
- 26 『全唐詩』に「古劍篇」に作る。
- 27 『全唐詩』に「塵」に作る。
- 28 俞紹初校点『王粲集』(中華書局, 1980)。
- 29 『六臣注文選』卷11では本文「暇」字に「五臣作假」と割注する。また李周翰注に「時天下喪乱逼迫, 無暇放假。借此日登樓而四望也(時 天下喪乱逼迫し, 暇無き故に假なり。此の日を借りて樓に登り四望するなり)」とある。
- 30 『說苑』卷14「至公」の全文は「秦始皇帝既吞天下, 乃召群臣而議曰, 古者五帝禪賢, 三王世繼, 孰是將為之。博士七十人未對。鮑白令之對曰, 天下官則讓賢是也。天下家則世繼是也。故五帝以天下為官, 三王以天下為家。秦始皇帝仰天而嘆曰, 吾德出于五帝, 吾將官天下, 誰可使代我後者。鮑白令之對曰, 陛下行桀紂之道, 欲為五帝之禪, 非陛下所能行也。秦始皇帝大怒曰, 令之前若何以言我行桀紂之道也。趣說之不解則死。令之對曰, 臣請說之。陛下築台干雲宮殿五里建千石之鍾萬石之虞。婦女連百倡優累千, 興作驪山宮室, 至雍相繼不絕。所以自奉者, 殫天下竭民力, 偏駁自私。不能以及人。陛下所謂自營僅存之主也, 何暇比德五帝, 欲官天下哉。始皇聞然無以応之, 面有慙色久之曰, 令之言乃令衆醜我。遂罷謀無禪意也」。
- 31 李雲逸校注『盧照隣集校注』(中華書局, 1998)。
- 32 『詩詞曲語辭典』は「梁園吟」に作るが誤り。
- 33 『全唐詩』に「拳首」に作る。
- 34 『全唐詩』に「聞」字に作る。
- 35 「垂裳」について連波・査洪徳校注『沈佺期詩集校注』(中州古籍出版社, 1991年)巻3では「垂裳, 此処当是説到了將近越裳の辺荒。越裳又作越常, 在驪州南(垂裳は, ここでは越裳に近い辺境地帯に着いたことを言うのである。越裳は越常にも作り, 驪州(訳者注: 現在のベトナム・ゲアン省南部))の南にある」と注する。ここではいわゆる衣服の制度を定め天下に礼を示す「垂裳」の意ではない。
- 36 汪紹楹校注『搜神記』(古小説叢刊, 中華書局, 1979年)巻20「邛都大蛇」。
- 37 『南史』巻2宋本紀。原典では「那可往」の前に「可畏(畏るべし)」とある。
- 38 注37に同じ。
- 39 『全唐詩』に「堪」に作る。
- 40 『全唐詩』に「奈」に作る。
- 41 『全唐詩』に「耐」に作る。
- 42 「何処難忘酒七首」其六。
- 43 2つの漢字を用い, 1字目から声母(子音), 2字目から韻母(母音)を抽出し両者を組み合わせることで漢字音を表す方法を「反切」という。この反切によって導き出された漢字音を「切音」という。
- 44 王琦『李太白全集』(中華書局, 1977年)巻8「田汝成曰, 杭人言寧可, 曰耐可, 音如能可。『漢書』, 揚越之人耐暑。註, 与能同。李太白詩, 「耐可乘明月」, 又「耐可乘流直上天」, 皆讀如能。鄭康成『礼記注』, 耐, 古書能字也」。
- 45 遼欽立輯校『先秦漢魏晉南北朝詩』(中華書局, 1983年)晋詩巻16。
- 46 『全唐詩』に「琵琶引」に作る。
- 47 黄征・張涌泉校注『敦煌變文校注』(中華書局, 1997年)巻4。
- 48 新版がどのバージョンを指すか不明だが, 今ひとまず『辞海』第6版(上海辞書出版社, 2009年)により確認した。
- 49 『全唐詩』に「義鵠」に作り, 「宋刻諸本皆有行字」と注する。
- 50 『全唐詩』に「麴蘖」に作る。

- 51 王琦『李太白全集』（中華書局，1977年）巻30詩文拾遺。『樂府詩集』巻28・相和歌辭三では殷謀の作とする。
- 52 劉淇『助字弁略』（中文出版社，1983年）巻2。
- 53 『全唐詩』に「曉發公安」に作る。
- 54 『全唐詩』原注「留（一作別）盧秦卿（一作郎士元詩）」。
- 55 『全唐詩』郭良詩に該当無し。戴叔倫「早行寄朱山人放（一作青冥）」（『全唐詩』巻273）に「剡溪路，聊且寄前（一作心与謝公）期」とある。
- 56 『遊仙窟校注』（中華書局，2012年）は「廻」に作る
- 57 支弦の柱を近づけ，弦を引き締めること。急弦。
- 58 『全唐詩』に「日（一作自）」に作る。
- 59 『全唐詩』に「瀾」に作る。
- 60 『全唐詩』では「焉」に作る。
- 61 『全唐詩』では「楚宮二首」に作る。「其二」注に「此首一本題作天水閑話舊事」とある。
- 62 明・胡震亨輯『唐音統籤』（故宮博物院編，海南出版，2000年）巻571戊籤二。
- 63 竹竿で舟をこぐ船頭。
- 64 船頭。
- 65 祭祀の際食べ物を盛る器。
- 66 『全唐詩』「惠」に作る。
- 67 曲名「別鶴操」とも。
- 68 『升庵詩話』巻12「竭来」。丁福保『歷代詩話統編』所収。
- 69 『呂氏春秋』「慎大覽」。
- 70 王引之著『經伝釈詞』（中華書局1956年）巻4。
- 71 『先秦漢魏晉南北朝詩』宋詩巻五。
- 72 『全唐詩』「猷」に作る。
- 73 『三国志』巻19魏書・任城陳蕭王伝の曹植「求通親親表」に「若葵藿之傾葉，太陽雖不為之回光，然向之者誠也。竊自比於葵藿，若降天地之施，垂三光之明者，實在陛下」とある。
- 74 韓愈「答崔立之書」に「猶將耕於寬閒之野，釣於寂寞之浜」とある。
- 75 陶器をつくるろくろ。執政の比喩。
- 76 嵩山の景勝地。
- 77 嵩山にある洞窟。
- 78 詩序に「王屋山人魏萬，云自嵩宋沿吳相訪，數千里不遇，乘興遊台越，經永嘉，觀謝公石門，後於廣陵相見，美其愛文好古，浪跡方外，因述其行，而贈是詩（一倣見王屋山人魏萬，云自嵩歷剡，遊梁入吳，計程三千里，相訪不遇，因下江東。尋諸名山，往復百越，後於廣陵一面，遂乘興共過金陵，此公好奇愛古，獨出物表，因述其行李，遂有此作）」とある。
- 79 『全唐詩』「沉」に作る。
- 80 地名。左思「吳都賦」に「賁祿山丘」とある。
- 81 黄公紹・熊忠『古今韻會舉要』（大化書局1979年）巻26六月「竭，丘謁切。角次清音。却也。一曰武壯貌。（詩）庶士有竭。（增韻）去也。（楚辭）車既駕兮竭而歸。注竭去也。又發語辭。竭来又聿来也」。
- 82 祭祀に供える食物。
- 83 『先秦漢魏晉南北朝詩』晋詩巻十七。
- 84 地名。現在の四川省西昌・漢源一帯。
- 85 それぞれ鄒は孟子，魯は孔子の生地。
- 86 せわしないさま。『論語』憲問篇に「微生畝謂孔子曰，「丘何為是栖栖者與。無乃為佞乎」（微生畝 孔子に謂いて曰わく，「丘 何為れぞ是れ栖栖たる者ならんか。乃ち佞を為すこと無からんや」と）」。
- 87 （前漢）揚雄の『太玄経』を指す。
- 88 『全唐詩』に「今止八首」とある。
- 89 この詩題のみ一詩題に二首あり，その他六首は一首一詩題となっている。
- 90 現在の安徽省鳳台県西北，淝水の北，淮水の南。八公とは漢の淮南王劉安の門客を指す。『淮南子』の序に見える。

- 91 「湫」は池を指す。韓愈「南山詩」(『全唐詩』巻336)に「因縁窺其湫(因縁して其の湫を窺う)」とあり、注に「湫者龍所居也。南山有炭谷湫(湫は龍の居る所なり。南山に炭谷湫有り)」とある。
- 92 張飛の字。
- 93 晋の武将・王濬の幼名。
- 94 『莊子』雜篇「讓王」に孔門の曾子は「三日不举火」という。
- 95 『論衡』書虚に「伝書言、延陵季子出游、見路有遺金。当夏五月、有披裘而薪者。季子呼薪者曰、「取彼地金来。」薪者投鎌於地、瞋目弘手而言曰、「何子居之高、視之下、儀貌之壮、語言之野也。吾当夏五月、披裘而薪、豈取金者哉。」季子謝之、請問姓字。薪者曰、「子皮相之士也。何足語姓名。」遂去不顧」とある。

On Distinctive Usage of Poems in Tang (唐)
Dynasty from SHICIQUYUCICIDIAN (詩詞曲語辭典)
Edited by Zhonghua Shuju (中華書局) Vol.8

TAKAHASHI Miki^{*1}, HASEGAWA Masashi^{*2}, ARIKI Daisuke^{*3},
OYAMA Iwane^{*4}, SEKI Sayuri^{*5} and TODAKA Rumiko^{*2}

Chinese Classics

(Received for Publication; August 31, 2024)

Abstract

This paper analyzed special usage of a Chinese poem of Tang 唐 dynasty. On the poetry and the play words from the Tang dynasty to Jin 金, Ming 明 dynasty, it depends on influence of the time, locality and a social class, slang, spoken language and a dialect are included. Those are different from the orthodox meaning, necessary to grasp the meaning of the special vocabulary (It's called "idoku 異読" in this paper) to interpret precisely. Therefore, we examined the examples of Tang poetry from the "SHICIQUYUCICIDIAN (詩詞曲語辭典)" "edited by Zhonghuashuju (中華書局)" which contains many examples of idoku.

As a result of the consideration, we found many vocabularies with the meaning of a word different in normal. So we recognized the importance of an accurate understanding of words, especially since the meaning of a single word relates to the entire poem. In all the examples, there are many idoku in "gobun 互文" and "tsuiku 對句".

Keywords: Chinese poem, Tang poetry, "idoku", poetic vocabulary

*1 Osaka Metropolitan University (3-3-138 Sugimoto Sumiyoshi-ku, Osaka-shi, 558-8585, Japan)

*2 Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501 Japan)

*3 Junior & Senior High School at Komaba, University of Tsukuba (4-7-1, Ikejiri, Setagaya-ku, Tokyo, 154-0001, Japan)

*4 Asia University (5-8 Sakai, Musashino City, Tokyo 180-8629, Japan)

*5 Hyogo Prefectural Amagasaki-Inazono High School (3-1-1, Inadera, Amagasaki-shi, Hyogo, 661-0981, Japan)